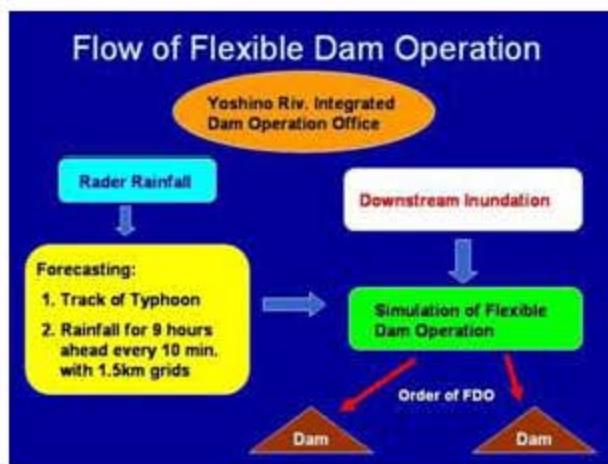
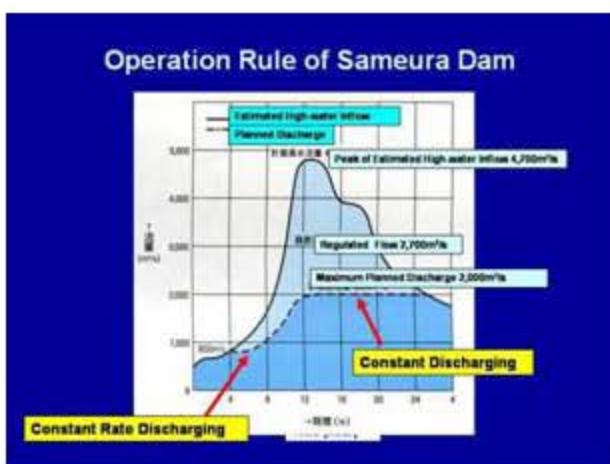
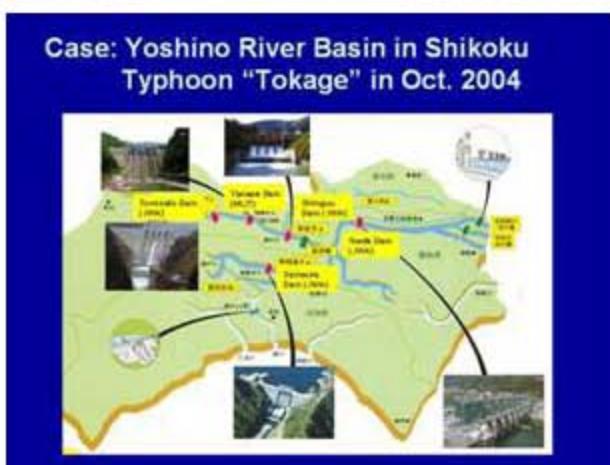
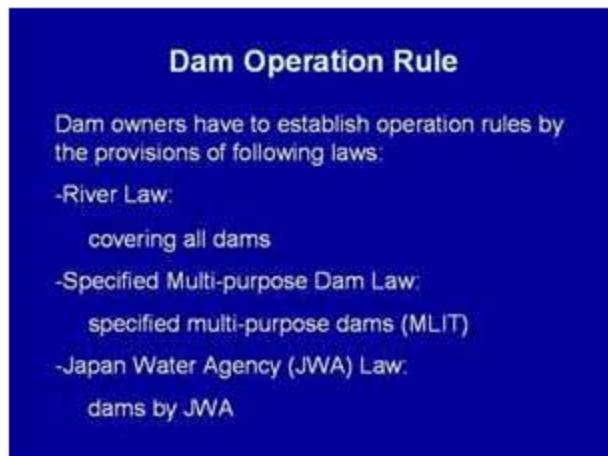
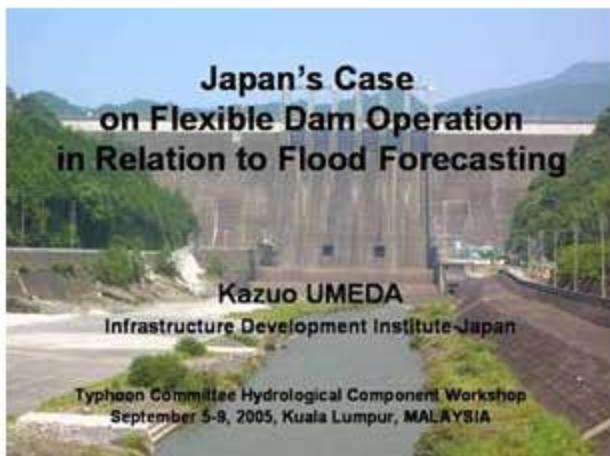


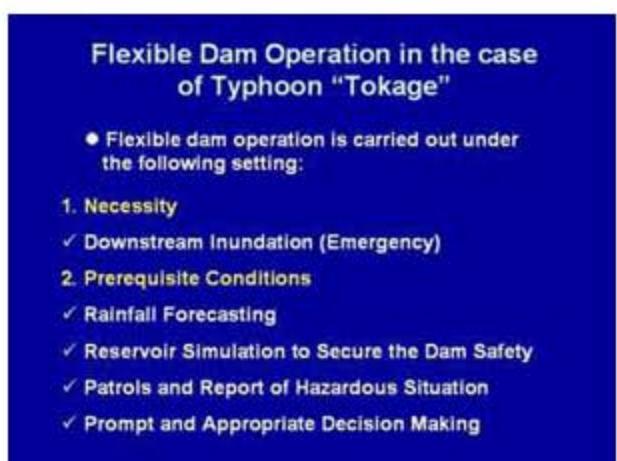
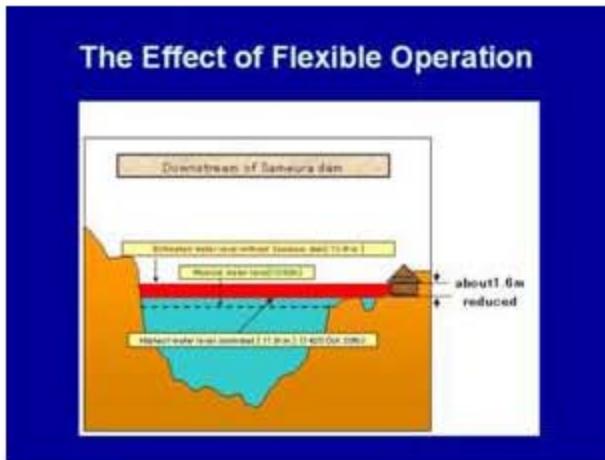
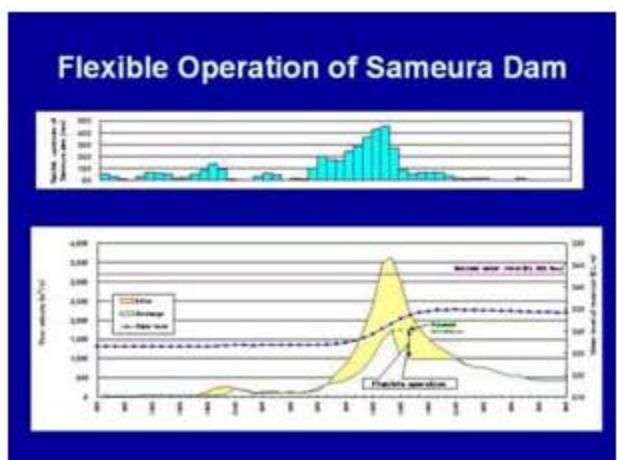
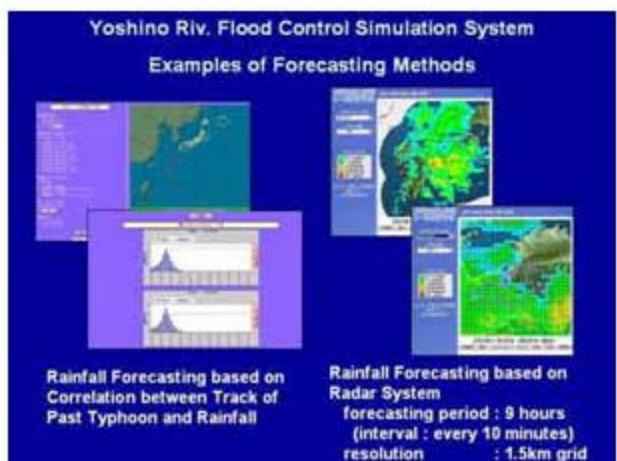
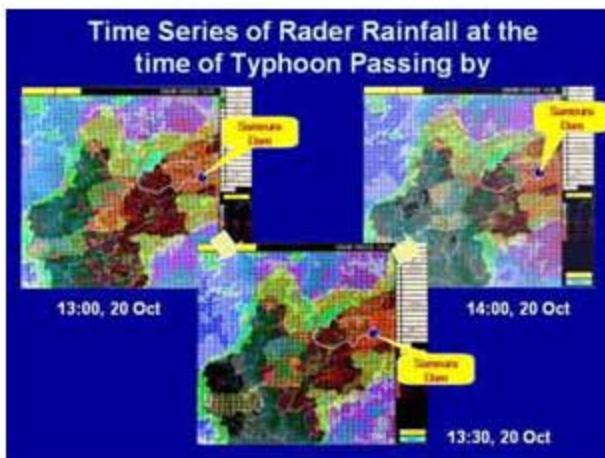
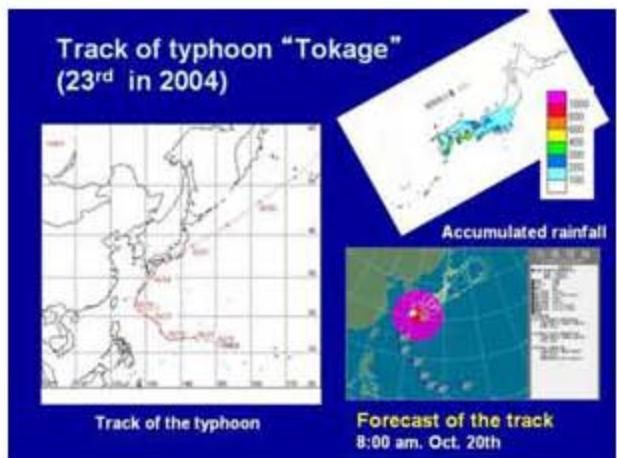
附錄一 參訪各單位資料彙整

- (一) 國際建設技術協會
- (二) 土木研究所
- (三) 三峰川綜合開發工事事務所—美和水庫
- (四) 三峰川綜合開發工事事務所—小渢水庫
- (五) 牧尾水庫管理所—牧尾水庫
- (六) 豐川用水綜合事業部—琵琶湖開發綜合管理所
- (七) 日吉水庫管理所—日吉水庫
- (八) 黑部河川事務所—宇奈月水庫
- (九) 關西電力株式會社—出之平水庫
- (十) 水資源機構本部
- (十一) 草木水庫管理所—草木水庫

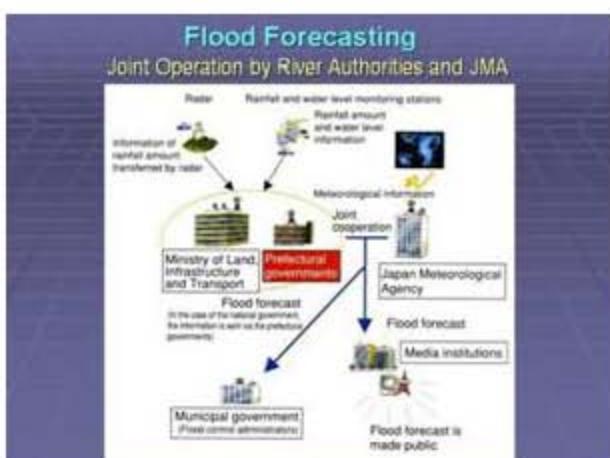
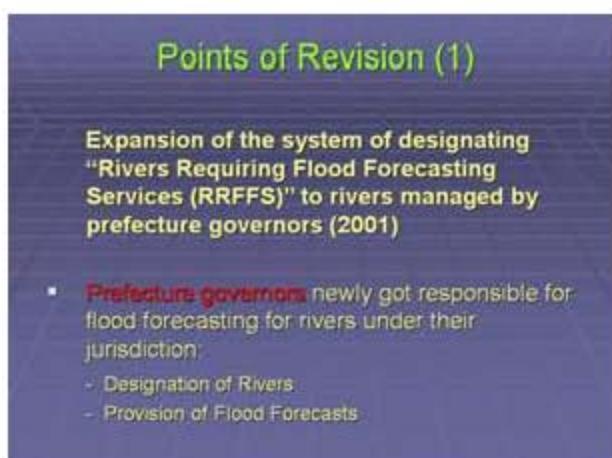
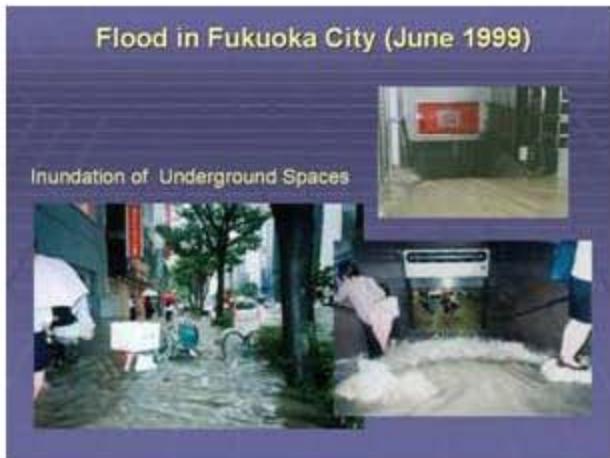
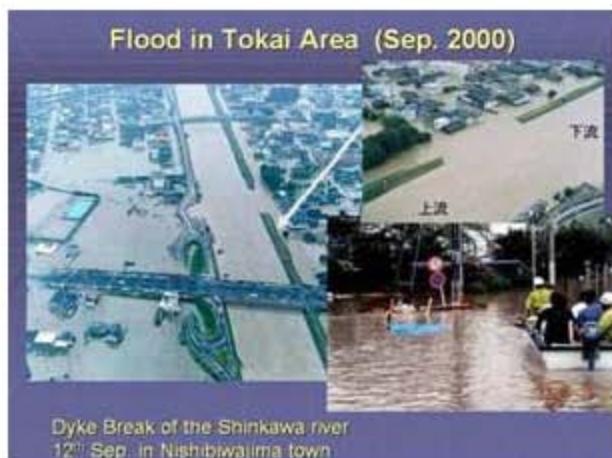
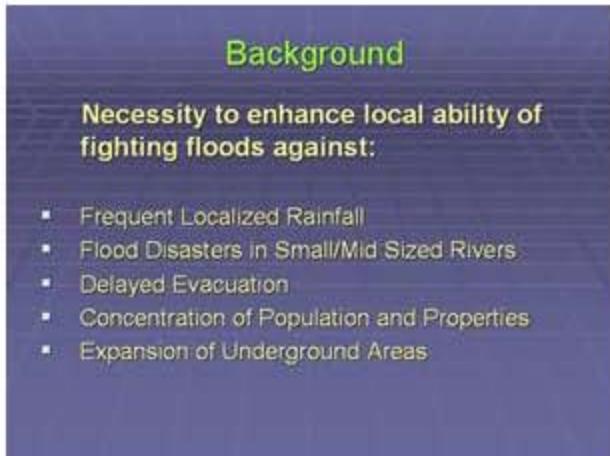
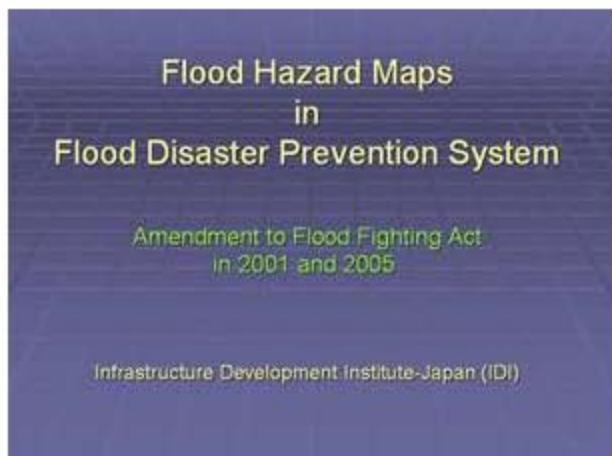
(一) 國際建設合作協會

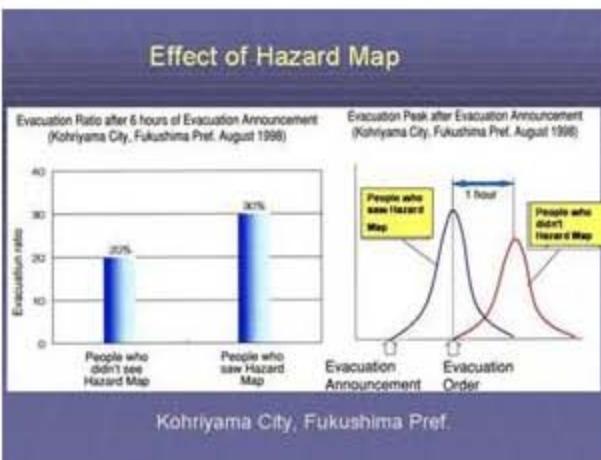
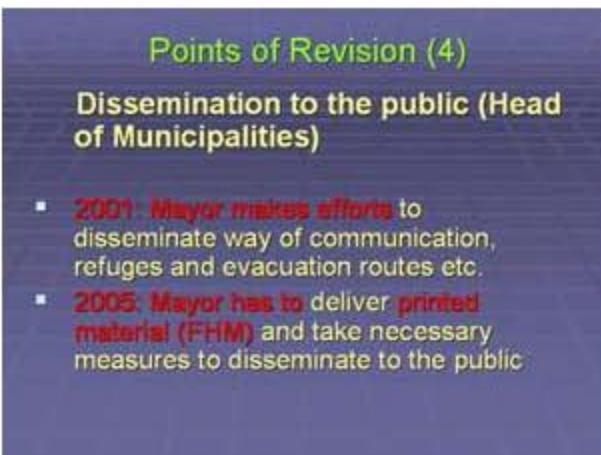
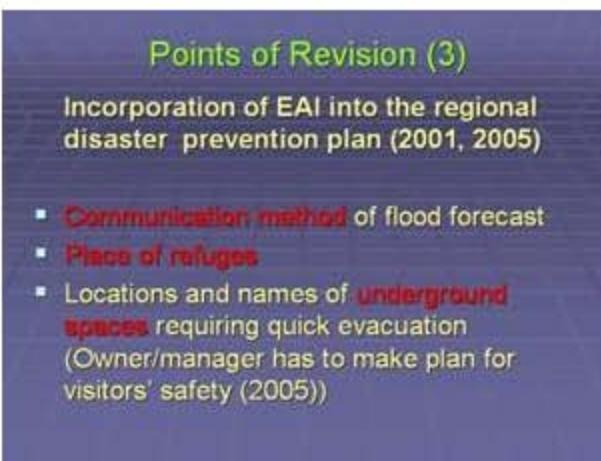
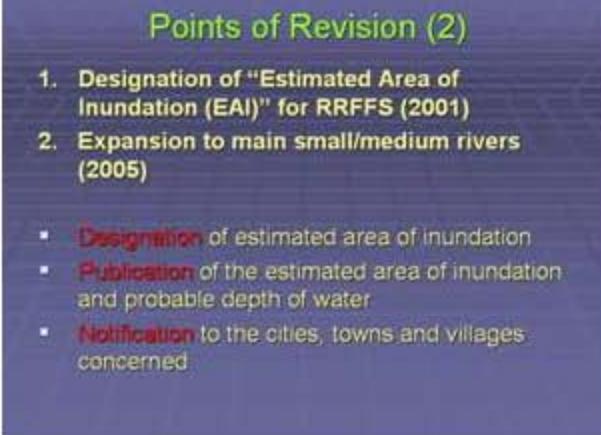
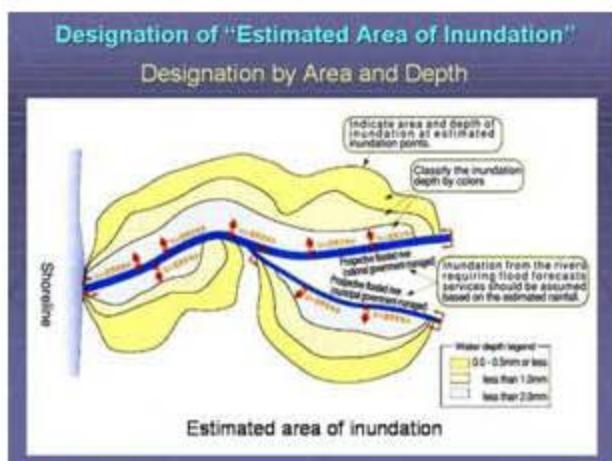
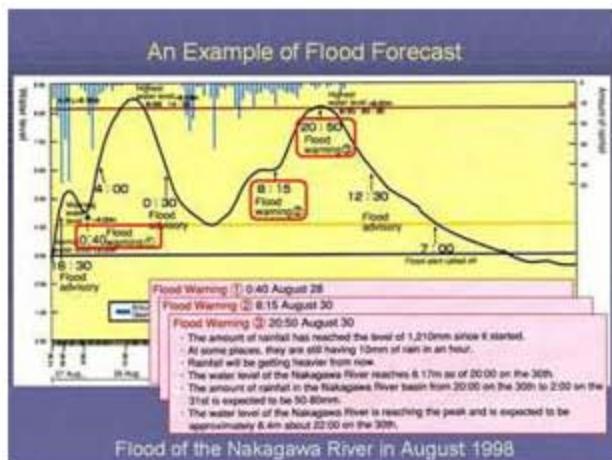
1. Japan's Case on Flexible Dam Operation in Relation to Flood Forecasting





2. Flood Hazard Maps in Flood Disaster Prevention System



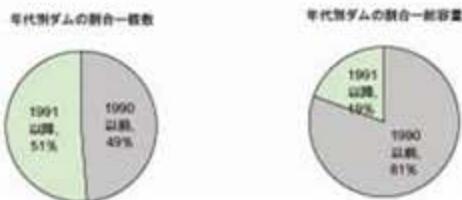


3. ダム貯水池延命対策調査

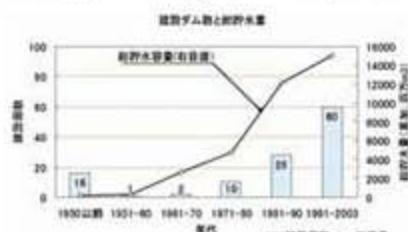
・ダム貯水池延命対策調査



年代別 ダム基数 総貯水容量



年間降水量：1,500～4,000mm／年
1人当降水量：24,000mm／年・人



ダム：117基 総貯水容量 150億m³

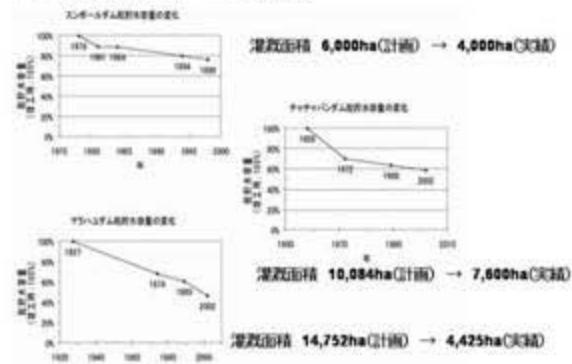
貯水池延命調査対象ダム



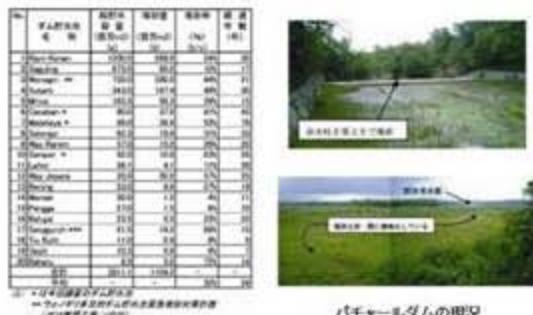
現地調査実施ダムの現状

ダム貯水池名	建設後年数(年)	深さ(メートル)	総容積に対する堆砂量(%)
スンボールダム	2.5	5	2.7
ワダスリンタンダム	1.6	2	0.7
タビュンサンボダム	1.4	2	不明
チャチャバンダム	4.5	5	4.1
マラハニダム	6.3	5	6.3

現地調査実施ダムの現状

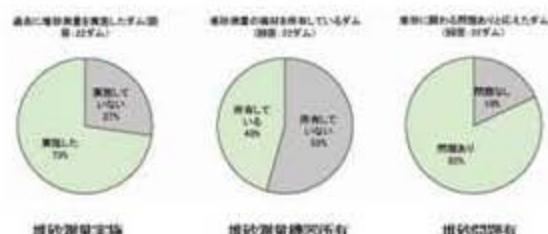


聞き取り調査実施ダムの現状



居住インフラ省 ダム安全委員会

アンケート調査ダムの現状



インドネシア ダム堆砂に係る課題の整理(1)

- ▶ 関連法制度・関連組織整備
 - ▶ 流域管理・水資源管理体制
 - ▶ 貯水池管理体制・管理情報の蓄積共有

➡ 対策組織・体制の確立

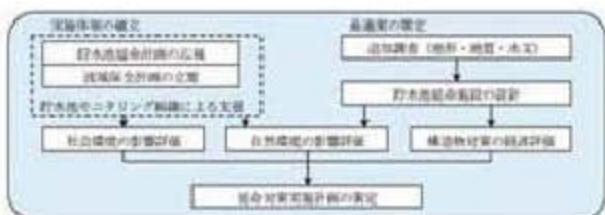
▶貯水池延命対策資金調達

➡ 対策実施優先順位設定

Phase 1



Phase 3



インドネシア ダム堆砂に係る課題の整理(2)

- #### ▶ 大量の土砂供給

非構造物の対策



Phase 2



(二) 土木研究所

Research on techniques for treating bottom sediment at enclosed water areas.

Contaminated sediment in a eutrophic lake causes elution of nitrogen and phosphorus, and is one of the major causes of water pollution. In Japan dredging is a main countermeasure against contaminated sediment. However, due to new problems such as endocrine disrupters, toxic substances, and conservation of biodiversity, the development of new sediment treatment methods is required. In this project we study a sediment treatment method that causes less damage to the benthic ecosystem, risk management and stabilization of bottom sediment, standardization of the method for evaluating sediment treatment techniques, and countermeasures for inflow sediment from rivers.

湖内環境化法による流入堆積物対策
Sediment inflow control by artificial lagoon

底泥処理技術
Sediment treatment method

評価手法の標準化
Standardization of evaluation method

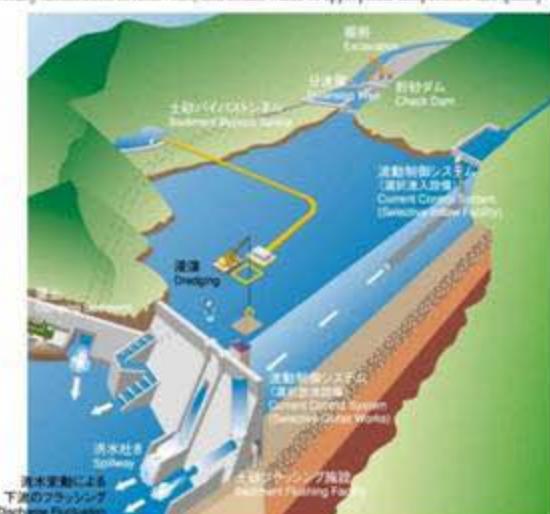
周底生態系の復元
Restoration of benthic ecosystem

窒素、りんの過剰の
メカニズム
Mechanism of nitrogen and phosphorus excess

汎泥中の有機性、
有害物質の研究
Research on organic and harmful substances in sediment

Research on techniques for controlling water quality and soil at dam reservoirs and downstream sections of rivers.

Dams, which are constructed to store water, also store sediments. Dams affect the temperature and quality of water in reservoirs and downstream rivers. Technologies are being developed to discharge sediment downstream, control the water temperature and turbidity distribution in reservoirs, and intake water of appropriate temperature and quality.



(三) 三峰川綜合開発工事事務所—美和水庫

美和水庫概要

水 庫 型 式：重力式混凝土壩

堤 高：69.1m

総貯水容量：34,300 千 m³

【目的】

- ①洪水調節
- ②かんがい
- ③発電



美和水庫再開発

貯水池容量の増加と土砂流入の対策を講じることにより、

- ①洪水調節能力を向上
- ②工業用水の新規供給
- 参加取下を申請されている
- ③既得かんがい用水の安定的補給及び既設発電所の発電機能維持・向上

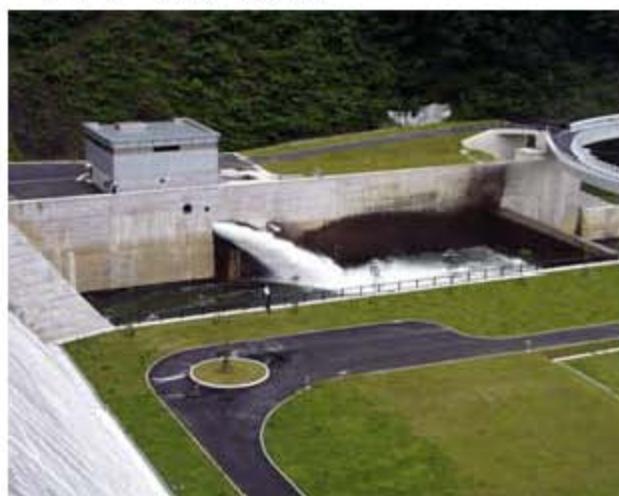
三峰川総合開発事業の洪水調節効果



現美和水庫の計画（かんがい）

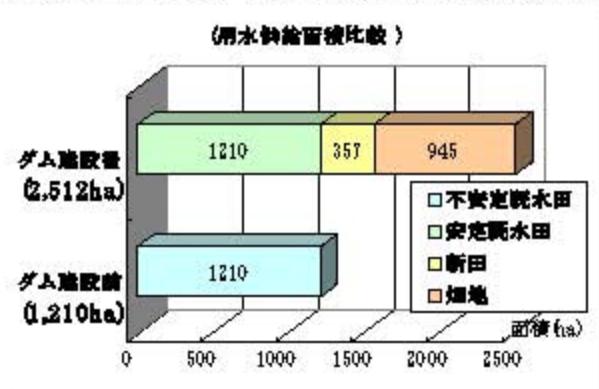
三峰川沿川（伊那市・高遠町）の農地 2,512ha にかんがい用水を補給

（かんがい区域比較図）



現美和水庫の効果（かんがい）

用水供給区域の拡大（面積比2倍強）伊那市の水田の約5割に用水を安定供給



現美和水庫の計画（発電）

美和発電所及び春近発電所（共に長野県企業局所管）において、それぞれ最大出力12,200kW及び23,600kWの発電を行う。

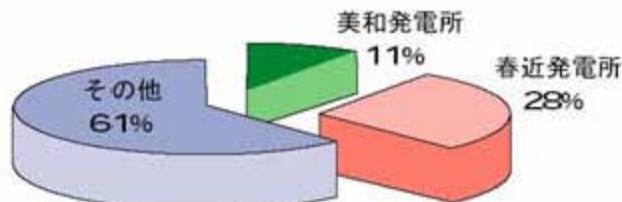


美和、春近両発電所の平均年間発生電力量供給量約150,000MWh

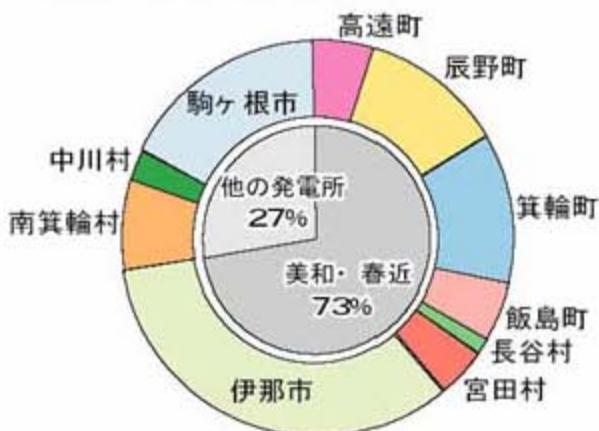
一般家庭年間消費電力の約4万3千世帯分上伊那地域の全世帯数の約7割に相当電気料金に換算すると年間約34億円

県の主力発電所県企業局が行う発電供給量の約4割

年間供給電力に占める割合



発生電力に相当する上伊那地域の世帯割合



事業の必要性（利水）

これまでも美和水庫は地域の発展に寄与

- 農業生産性の向上
- 電力の供給

三峰川総合開発事業により、既得かんがい用水の安定的供給、既設発電所の機能維持を図り、今後も地域の発展に寄与し続けることが必要

現美和水庫の効果（風倒木の捕捉）



風倒木の流出により橋梁が破壊された例

堆砂掘削

美和水庫貯水池内に堆積している土砂を掘削し、新たな容量を確保することにより、治水・利水機能の増進を図るとともに、今後必要な堆砂容量を確保する。

恒久堆砂対策

洪水をバイパストンネルにより水庫下流に迂回させ、洪水時の土砂流入による貯水池容量の減少を防止し、治水・利水機能の安定的維持を図る。

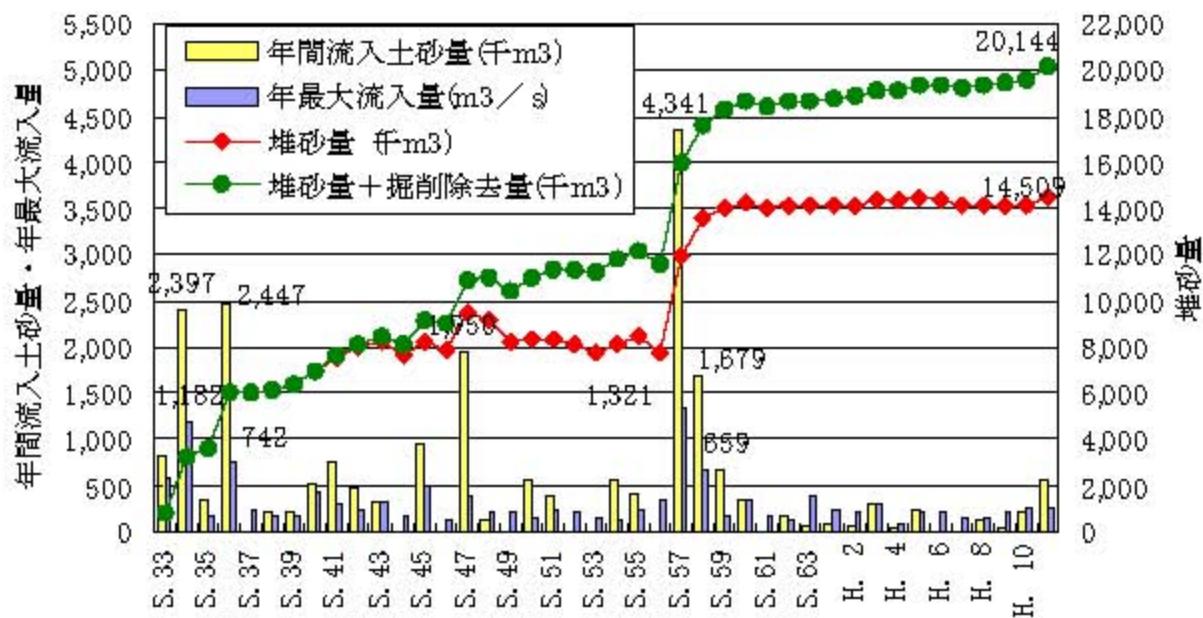
水庫湖の堆砂

予想をはるかに超える 20,144 千 m³(H11 年度末時点) の土砂流入（当初予想の約 3 倍）

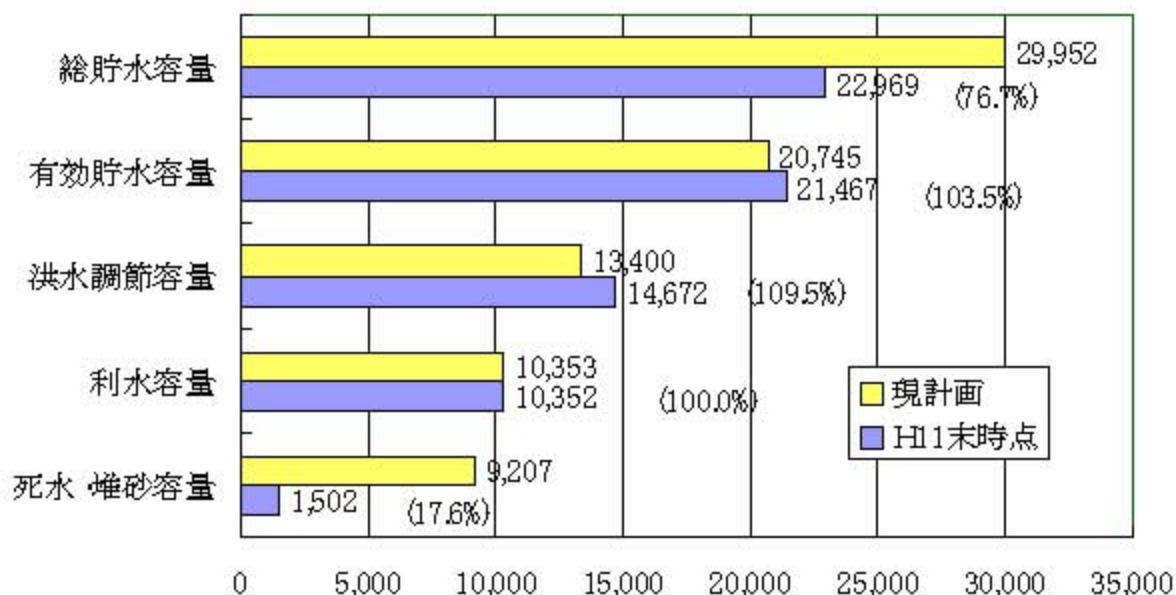
管理工事の為に水位を低下させた状況（美和水庫/平成元年）



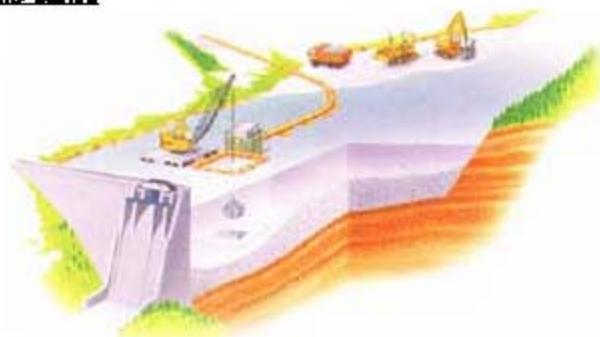
美和水庫への堆砂の推移



美和水庫貯水池容量の状況

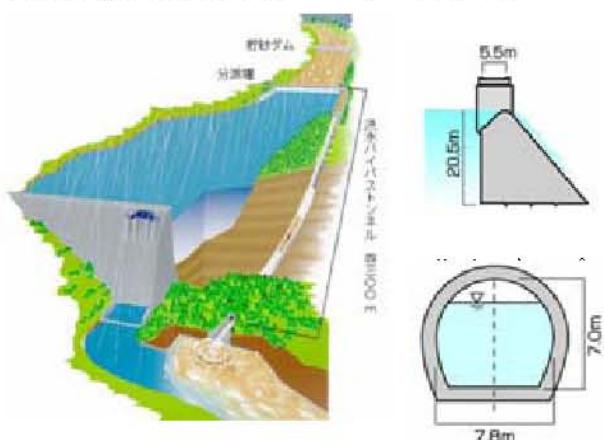


堆砂掘削



恒久堆砂対策

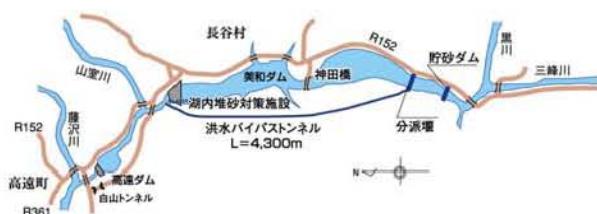
洪水を最大約 $300\text{m}^3/\text{s}$ バイパスする。



年間土砂移動量図



美和水庫再開発施設配置図



分派堰のしくみ



貯砂水庫（下流面）（平成5年暫定完成）



分派堰（平成16年度完成）洪水バイパストンネル（平成16年度完成）



初試験運用(H17.7.5)



呑口(主ゲート)午前11時にゲートを開け、
毎秒20tの水をトンネルに流しました

初試験運用(H17.7.5)

吐口ゲートを開けてから約30分後、トンネル
を通った水が吐口から流れ出し、三峰川に合
流しました



(四) 三峰川綜合開發工事事務所一小瀨水庫

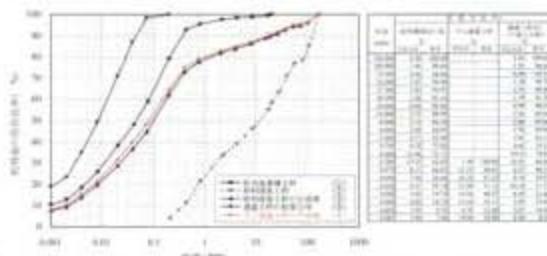
小渋ダム 直轄堰堤改良事業



国土交通省中部地方整備局
天竜川ダム統合管理事務所

(3) 寶島大陸の構造

地下水流入土砂の粒度分布を、①地下水流量積土砂、②砂利層土砂、③ダム通過土砂に分類して検討し、これらを合成することにより算出しました。



【野水而流入主神心配出】

小浜ダムにおいては、土砂輸送形態に着目し河床砂・底泥砂・ウォッシュロードをそれぞれ以下の相違区分で分類しました。

南油籽	4.2±3.3%	流入土地税17%
北油籽	3.6±5.2±3.3%	流入土地税18%
75%±2.1	3.2±2.1	流入土地税18.5%

小波ダム貯水池の堆砂概要

(1) 野水底運動の進行

小浜ダムにおける貯水池底部分は、計画堆砂面以下の領域であるが、有効貯水容量内への堆砂も進行しつつあります。



四-1 ハセダム断面

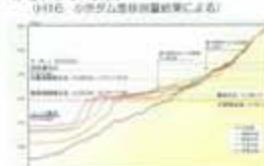
平成16年度までの地盤率は14.586km²（実績）であり、このうち約80%の11.2150km²が排水能力内での地盤率は約58%です。また、有効貯水容量内地盤率は約17%（0.2436km³）（有効貯水池容量内地盤率は6%）が接種しております。治水・利水・防震容量の基本計画額を減少させています。

(2) これまでの難易度調査

これまでの貯水池保全事業は、昭和52年度に第1砂ダム区、平成元年度に第2砂ダムを完成させています。また、貯水池堆積面積及び砂利採取による平均16万m³の土砂採取を継続的に行っていまます。

更に、上流端において、砂防事業による土砂流出抑制も進められています。

一方、現在小浜ダムの堆砂量は、1.4~1.6kg/m²付近まで進行(図-1)しており、ダム完成当時、1.6kg/m²の堆積が約5.2mだったのに対し、現在は約5.82mと30cmも土砂が堆積しています。



第一季：小猪罗杰神秘失踪（H176+原创）

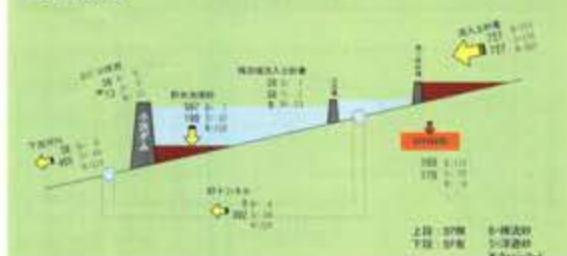
(4) バイパス事業による財源拡充

小頭ダムへの流入土砂量に対し、放流能力600m³/sの土砂リサイクルを実現することにより、ダム堤内の年間堆積量を約20万m³（これまではより30%削減）とすることが可能である。

平成16年3月現在、測秒回転内の空き容量は785万m³です。計画容量が満杯になるまでの期間は約40年後となり、(無対策では14年で満杯状態となる)約26年の延長が図られます。



土砂バイパスによる堆砂対策の 概念と土砂収支



【基础数据】(基础类,人工数据,100个/页)	【数据统计】(基础类,100个/页)
基础类(人)-----100	基础类(数据)-----100
基础类(人+基础)-----100	基础类(数据+基础)-----100
基础类(人+基础+逻辑)-----100	基础类(数据+基础+逻辑)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互+设计)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互+设计)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售+客服)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售+客服)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售+客服+售后)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售+客服+售后)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售+客服+售后+物流)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售+客服+售后+物流)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售+客服+售后+物流+金融)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售+客服+售后+物流+金融)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售+客服+售后+物流+金融+法律)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售+客服+售后+物流+金融+法律)-----100
基础类(人+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售+客服+售后+物流+金融+法律+其他)-----100	基础类(数据+基础+逻辑+UI+交互+设计+测试+运维+产品+市场+销售+客服+售后+物流+金融+法律+其他)-----100

11 第3章 初級の土地城主法

新加入的子集，並用相應的子集來表示新元件的參數。實例詳見 Table 1-2 在上列的單元一節中所敘述的「[如何將一個子集](#)」。

●吐口施設水理模型実験



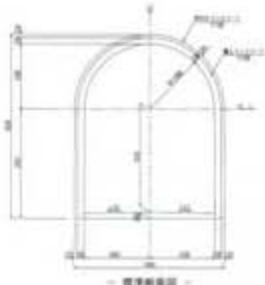
【実験模型】 滝河：1/4.0
模型実験斜面：トンネルは河口より上流に120m位置に設
置しています。
左写：実験では、水路内にヘルマウスを設
置して水面を水流水深に合わせて実験して
います。河口は河口より上流に200m下流
に500mを距離。



— 吐口模型概要図 —

管理用道路トンネル

総 長：212.4m
斜傾角度：1/10
片側限界高さ：619.000m
車道交換部高さ：594.200m
トンネル断面積／路面断面積：19.90m² / 23.72m²
車道への付替：524+300.0m



— 断面概要図 —

吐口施設に適した魚道の検討

吉日治河は種子島在マートルの間に複数箇所で河岸壁、第3野谷橋間で一帯となった魚類対策
を検討・立案し、魚道設置を計画しました。

他設置点

●吉日治河に実施されたひび川魚道設置結果

これまでの調査で、吉日治河・ダム頭先・ダム
頭入川において建設された魚道2箇所に魚礁(ヒ
オイカ)、アリゲーター(ワニ)、ワカサギ、イワ
シ等が確認されています。

これらの結果として、他の魚道の設置で使用
するとの上流域へと漏水する、生息へ導入して重
視する必要があります。

よって、建設本体幅が広く分の施工工期で工事
が済んでいた吉日治河・ワカサギ対策実施いたしました。



【ヒオイカ】
身長：100~250mm
足長油度：80~100mm
足長油度：100~150mm
足長油度：150~200mm
足長油度：200~250mm
足長油度：250~300mm



【ワカサギ】
身長：20~100mm
足長油度：50~100mm
足長油度：100~200mm
足長油度：200~400mm
足長油度：400~700mm

設計概念

●魚道の基本条件

既定諸式	基準
計算流量	0.75m ³ /s
計算水深	1.0~2.0m(s)
必要水深	最低200mm
水 壁 壁	1.0m
水道勾配	0.7%
開閉水深	0.20m以上

●魚道計画の諸元

構造・機器	規 格
水道形式	階段式
水道水深	1.0~1.75m(s)
水道延長	34.0m
水道底高	0.2m
放流装置	砂利水
水 壁 壁	斜け上層下水
開閉水深	0.20m



魚道模型標準計画

第3貯砂堰（掃流砂排除ダム）

小ダムで計画される土砂バイ

バストンネルは、地形の制約上導
入して急な斜面(1.50)となるため、
トンネル内を流れる土砂を逃がす
事は難航途となります。

そこで既存のトンネルの摩擦対
策として、トンネル出口の上流に
貯砂堰を設け、掃流砂を止めるこ
とににより運河小石がトンネル内に
入らないようになります。

半径16年床深までに下記各箇
所より工事が進んでいます。

第3貯砂堰は半径17年床深完成
を目指して施工施工しています。



【貯砂堰】

重力式堤堰

H=30.0m, H=10.0m

貯砂量: V=約1,500,000m³

施工方法

●吐口位置・出口の工事場所・コリ名の問題
流水場により、表面出力付近は根本
はごりコロによる堆積する場所が考えられる
ため、着地整理を始めた上部強度化して、
上部アート多段行いました。



●各導入口の構造者

河床の低下により、流失の可能性が抱か
れていたため導入口を直線式ではなく、カ
ーブ方式でコンクリートを施しています。

●各導入口の構造者

●各導入口の構造者
各導入口の構造者として
施工組織による各導入口を通過

●排水ダム

●排水ダム
排水ダムの目標とするまで
満水位の範囲でできる

●排水ダム

排水ダムの目標とするまで
満水位の範囲でできる

国土交通省 中部地方整備局 天竜川ダム統合管理事務所

〒399-3801

長野県上伊那郡中川村大字6884-19

Tel: 0265-88-3743 (管理課番)

<http://www.cbr.mlit.go.jp/tedamu>

100.100

(五) 牧尾水庫管理所—牧尾水庫

牧尾ダム

「愛知用水」の水源施設

- ① 愛知用水公団を設立
- ② 外資導入(世銀借款)
- ③ 一貫施工(ダムから末端水路、水道・発電施設)
- ④ 米国コンサルタントの技術協力
- ⑤ 全面的な機械化施工
- ⑥ 5年という短期間で事業が完成



- ★ 速やかな効果の発現
- ★ その後の土木技術への多大な貢献



昭和30年 10月	愛知用水公団設立
昭和32年 8月	世界銀行借款契約及び政府保証契約締結
昭和32年 10月	工事に着手
昭和36年 10月	建設工事完了・放流開始

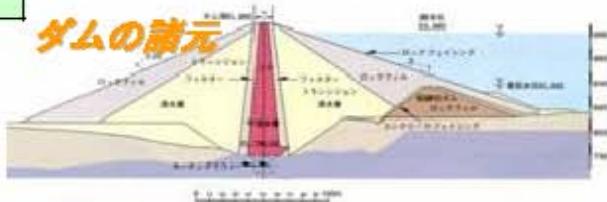
平成14年5月28日「NHKプロジェクトX」で放映

余水吐

最大 3,200 m³/sec

形 式：シュート式余水吐

ゲート：テンダーゲート 4 門 (10m×10m)



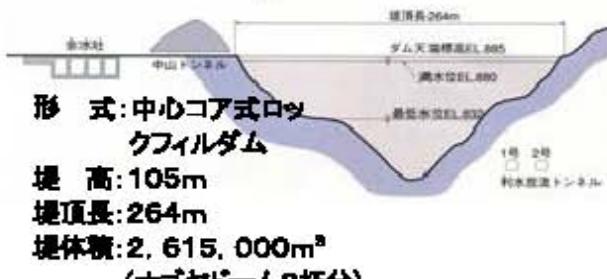
取水塔

高さ：69.4m

構造：鉄筋コンクリート造

制水門：運動バイパス弁付鋼製
キャタピラゲート

スクリーン：鋼製1連7段



形 式：中心コア式ロックフィルダム
提 高：105m
提 頂 長：264m
提 体 積：2,615,000m³
流域面積：304km² (直接 73km²、間接 231km²)
湛水面積：2.47 km²
総貯水量：75,000,000 m³
有効貯水量：68,000,000 m³
計画堆砂容量：7,000,000 m³
着工：昭和32年11月
完工：昭和36年3月 (41ヶ月間)

工事費：9,766,000千円

移転家屋：184戸（王滝村141戸、三岳村43戸）

ダムの大きさ：ダムにたまる水の量は、ナゴヤドームの約55杯分

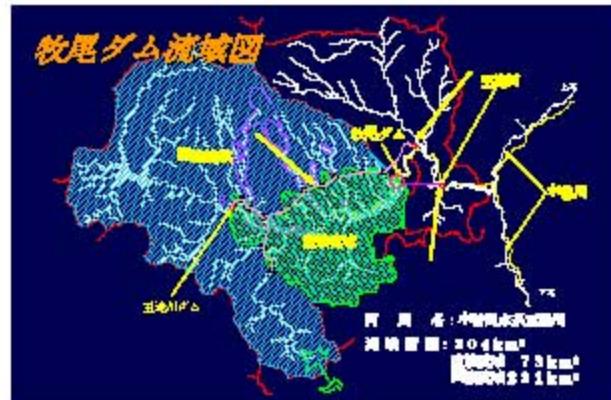
ダムのかたち：牧尾ダムは、土と石や岩を積み上げてつくられています。こうした作り方のダムをロックフィルダムといいます。材料の石や岩は近くで採取しています。

雨量計

- | | |
|------------|-----------|
| 1.三笠山 | GL.2,130m |
| 2.ウグイ川 | GL.1,600m |
| 3.ウグイ川（仮説） | GL.1,600m |
| 4.池の越 | GL. 970m |
| 5.管理棟 | GL. 889m |

水位計（基準高）

- | | |
|-------|-----------|
| 1.池の越 | EL.898.5m |
| 2.六段橋 | EL.-----m |
| 3.取水塔 | EL.832.0m |



水質調査

- 1.ダム湖 (10m×4)
- 2.濁沢川 (濁沢川)
- 3.松原 (ダム湖流入口)
- 4.三尾発電所 (放流口)
- 5.木曽ダム (取水口)

積雪量観測

- 1.八海山 (五合目) 標高1,500m

1.管理の状況（管理開始以来 40年目）平成

12年7月25日の実績

貯水量：38,789千m³（貯水率57.0%）

平年の時期 56,000千m³

水位：869.63m（満水から約10.18m）

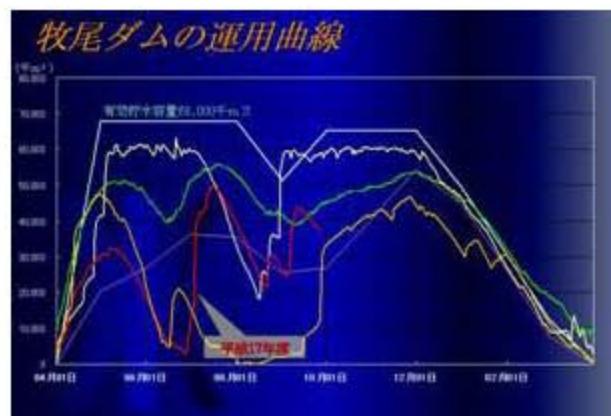
流入量：32.31m³/s

放流：21.09m³/s

降雨量：4月からの累計 624mm

（水道 1m³/人 約 20万人）

（名古屋市 1日分 約100万m³）



2.流域

全体では 304km²であるが直接流域 73km²・間接流域 231km²となっており、間接流域には関西電力の渓流取水施設が11カ所（現在は濁川が破損しているため10カ所）あり、少量の降雨（40mm以下の降雨）ではダムへの流入はない。

3.流況

- ・牧尾ダムへの年間流入量・降雨量等

牧尾ダム地点：
（平均） 2,161mm
（11年） 2,400mm
（6年） 1,241mm

- 日本の平均雨量： 1,714mm
 東海地方：2,084mm 北陸：2,447mm 南九州： 2,440mm
 インドネシア：2,620mm エジプト：65mm
- ・流入量 年平均：約 4.9 億 m^3
 11年：約 5.7 億 m^3
 6年：約 2.2 億 m^3
 - ・積雪量 平成 12 年 4 月上旬：83cm（最近 10 年間では多い記録）
 - ・放流量 年平均：利水・発電 3.9 億 m^3 無効（洪水）1.0 億 m^3
 11年：利水・発電 4.0 億 m^3 無効（洪水）1.7 億 m^3
 - ・洪水調整
 ダム流入量が毎秒 400m³ 以上の発生回数は年平均 3 から 4 回程度であるが、平成 11 年は
 5/27 6/27 6/30 7/3 9/15 9/20 11/1 の 7 回発生。

渇水時の貯水池状況(1)



1984年9月14日午前8時48分。

信仰の山「木曽御嶽山」一帯を襲った長野県西部地震はM6.8の直下型でした。

山岳地震としては未曾有の被害をもたらした大震災は、風光明媚なこの地の名勝にも大打撃を与えました。土石流でせき止められた王滝川は天然ダムを出現させ、林道王滝線は水没。絶景「氷ヶ瀬峡谷」はその絶壁にかかる吊り橋とともに流出し、往時の美しい景色を失いました。しかしながら、牧尾ダムはこうした烈震にも耐え、専門家の調査により、その安全性は確認されました。



堆砂対策事業の概要

工事の概要 ①堆砂の掘削除去 (475万m³)
②構造物：床止工1ヶ所／貯砂ダム2ヶ所

工期 平成7年度～平成18年度(12年間)

事業費 ◆300億円



牧尾ダム堆砂対策事業

堆砂対策事業の経緯

- 1984.10 牧尾ダム運用開始
- 1984.10 鉛錠堆砂
- 1985.3 長野県西部地震発生 サニチューード8.3
- 1986～ 应急対策の実施
- 主 公 墓・家屋復旧工事 ○宮林筋・御岳断定事業施設災害復旧工事
○農 農 墓・河川災害復旧等 ○主 溪 村・云佐土木、農林開拓復旧工事
- 1986.3 牧尾ダム堆砂対策事業認可 (愛知県水防部事業に追加)

堆砂の推移



御嶽山南麓を震源とした長野県西部地震は内陸型としてはかなり大きなもの。御嶽山の山腹及びその周辺にわたって大規模な斜面崩壊、岩屑なだれや土石流が発生し、29名の尊い人命が失われました。

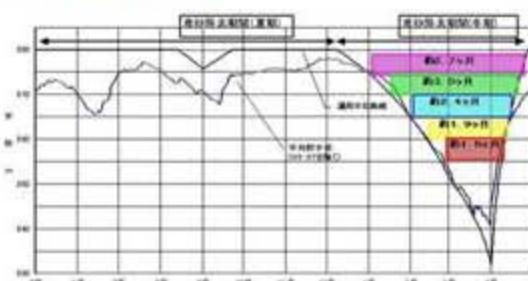
また、道路の寸断や河川の遮断など、被害の様相は多岐にわたり、山岳地帯における内陸型地震の被害について、従来の科学的常識を改めさせるような問題が提起されました。

牧尾ダムの流域内に位置する御岳山（標高3,063m）が昭和54年10月28日に噴火、昭和59年9月14日（午前8時48分）に発生した長野県西部地震(M6.8の直下型)により、御岳山腹及びその周辺にわたって大規模な斜面崩壊が発生、その面積は580ha、推定崩壊土量3,600万m³で、そのうち2,100m³が王滝川に流入した。

29名の尊い命が失われた（行方不明者15名）
(濁川・柳ヶ瀬地区15名 滝越地区1名 東地区13名 計29名)

ダム上流からの土砂の流入防止策を講じるとともに、すでにダム湖内に流入している堆積土砂を除去することにより、牧尾ダムの貯水機能の回復と保全及び災害の未然防止を図ることを目的として平成7年度に事業に着手した。

堆砂除去の施工時期



現在まで25件の工事を実施、現在7件の工事が実施中

この工事を実施するために、王滝村・三岳村の人たちには土捨場確保のための家屋移転・工事用重機械の騒音・塵芥・ダンプ等の通行などについて多大な協力をいただいている。



松原土捨場へ(BH4.0m³+重ダンプ)



小島土捨場へ(BH1.2m³+10tダンプ)

堆砂土除去の工事時期：ダム水位が低いとき



現在まで 25 件の工事を実施
現在 7 件の工事が実施中



この工事を実施するために、王滝村・三岳村の人たちには土捨場確保のための家屋移転、工事用重機械の騒音、塵芥、ダンプ等の通行などについて多大な協力をいただいている。

堆砂土除去の工事時期：ダム水位が低いとき

緑の再生基盤づくり

濁沢などの土石が再移動し、二次災害を引き起こさぬようカラマツ丸太の土留工による森林の基盤づくり、治山ダムによる流路固定・渓床の安定が図られた。(林野庁、長野県等)また、災害直後からボランティア等も参加し植栽が行われ、森林の早期復元が図られている。

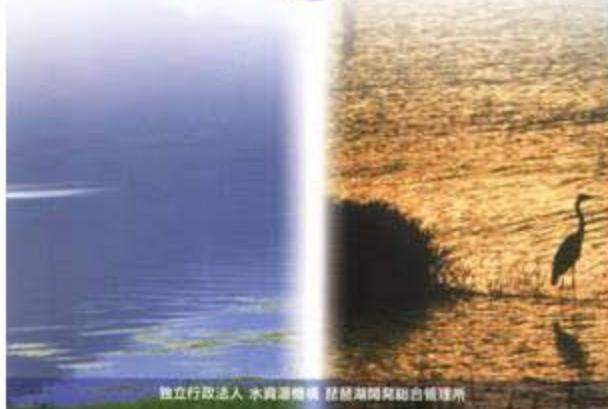


(六) 豊川用水総合事業部—琵琶湖開発総合管理所

琵琶湖開発事業

琵琶湖・水未来

LAKE BIWA
A Reservoir for the Future



独立行政法人 水資源機構 琵琶湖開発総合管理所

治水対策

- ・琵琶湖・管理用道路の建設 —— 敷地面積10.4ha
- ・内水排水施設の整備 —— 14箇所
- ・西瀬戸あわじ灘田の川事業 —— 約130万m³
- ・琵琶湖への流入河川整備 —— 13河川（湖岸整備事業に含む）

利水対策

- ・琵琶湖洗堰バイパス水路により下流地への放流水量（水質）をさせ細かく西瀬戸自動車道下流側
- ・農業用水路 —— 約16,800ha
- ・上木戸調整池 —— 50ha
- ・工業用水路 —— 17路線
- ・水道網 —— 156路線
- ・漁港施設 —— 71港
- ・河川改修 —— 54河川

琵琶湖の開発は、環境を守りながら…

琵琶湖開発事業は、自然環境への影響の低減や伝統的な漁業、農業等文化財を守る工夫をしながら進みました。

① 環境の保護と創造

北陸では、自然豊かな林地を海岸堤の沿線上に残し、海岸堤周辺では、自然を学びつつ、新たに正しい知識を継承につなげて育む取り組みを実施しました。

土木・治水部門

土木・治水部門

② ヨシ種植

湖底泥質帯にやむなく失ってしまった一帯のヨシ床について、海岸底面近くに新たにヨシを植え、その復元を行いました。

ヨシ種植

③ アコニット人工河川

豊かな水生植物であるアコニットを保護するため、湖の水位が低下したときの育成場として、安曇川河口と琵琶湖河口に人工河川をつくりました。

アコニット人工河川

付近で氾濫し、さらに湛水被害が広がります。

海岸堤や内水排水施設が、このような湛水による被害を最小限に抑えています。



湛水時：琵琶湖の水を効率的に利用し、湛水による被害を軽減します。

- ・琵琶湖洗堰のバイパス水路による精確な流量調節
- ・給水機場、水位保持堰等の操作による内湖の環境保全

琵琶湖水位の低下時には、水を有効に利用するため、琵琶湖洗堰に計画したバイパス水路から必要な流量を精確にコントロールして下流へ放出します。また、琵琶湖開発事業で淀中に海岸堤をつづったことにより新たに人工的な内湖が誕生しましたが、この中の海岸堤の区域には、内湖に琵琶湖をつなげるため、河口部を設けて、水門や、水位保持堰および給水設備等を設置しました。通常時は河口部を開けておくことにより、自由な水の流れを確保し、湛水時には水位保持堰や給水設備等の操作により、内湖の水位を保ち、水質の悪化を防いでいます。



琵琶湖流域環境情報の収集

水文・気象情報

雨量、水位、水質、流量等のデータが琵琶湖流域に設置した観測所から毎時と送られてきます。これらのデータは洪水時や湛水時における施設の操作に役立てられます。

総合自動観測による琵琶湖情報

琵琶湖の水質を常時監視するために、雨量計・水位計・流量計等のセンサーを設置して、水位計は「Water Surface Level」にて、流量計は「流量計」にて監視を行っています。



沈水植物等の琵琶湖水田地調査

水資源機構では、水位低下による琵琶湖沿岸の生物への影響を把握するため、沈水植物等の定期調査を毎年実施するとともに、数年に1回定期的に、琵琶湖流域全域を対象に沈水植物の調査を行っており、湖の水環境に関する各種調査を実施しています。

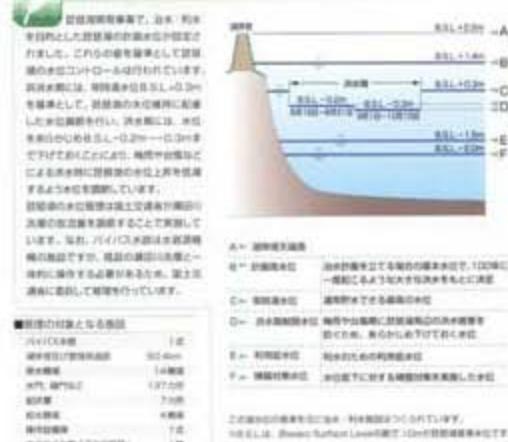
琵琶湖開発総合管理業務

琵琶湖開発事業で設置した施設の操作及び維持・管理等の修理を行い、上下流の水位・水質のバランスを考えた治水並びに水道用水・工業用水の供給を行っています。

また、施設の適切な操作のために、水位、雨量、水文等のデータ収集、琵琶湖の水質調査、水位変動に伴う生物への影響等を調べるための沈水植物等の定期調査・モニタリングを行っています。

水位のコントロール

琵琶湖の計画水位



施設のメンテナンス いかというときのために備えます。

- ・海岸堤の点検・修理
- ・水門・水門・排水閥門等の点検・修理
- ・施設の定期点検



琵琶湖
水系

琵琶湖総合開発事業と琵琶湖開発事業

琵琶湖総合開発事業は、いかで初めて水資源開拓と水質地域開発を一括的に施された事業であり、水資源開拓企画と、水質地域開発が実施する「琵琶湖総合開発事業」として、両計画が実施される「地域開発事業」で構成されました。

琵琶湖総合開発事業は「琵琶湖総合開発特別措置法」に基づく「琵琶湖総合開発計画」により、1973年から1997年までの25年間にわたって実施されました。

琵琶湖総合開発事業	
水資源開拓事業	水質地域開発事業
河川網・灌漑排水網 水道網 電力供給 港湾運送 河川の整備のための政策 河川の整備	湖水・管理運営・水質 水質・水文 工事・水文・水質 工事・水文・水質 工事・水文・水質
	水質・水文 水質・水文 水質・水文 水質・水文

事業の効果

琵琶湖総合開発事業で実施した灌水網や排水網などの整備によって、湖までは水の蓄積量が大きくなり保たれかのようになり、事業の終了後も起こった1994年の高水位や、1995年の高水位においても、以前のような深刻な被害は発生しませんでした。

1994年：高水

琵琶湖総合開発事業で、水位が保たれていました。水位が保たれていたことで、灌水網や排水網によって、湖までは水の蓄積量が大きくなり保たれかのようになり、事業の終了後も起こった1994年の高水位や、1995年の高水位においても、以前のような深刻な被害は発生しませんでした。

1995年：高水

琵琶湖総合開発事業で、水位が保たれていました。水位が保たれていたことで、灌水網や排水網によって、湖までは水の蓄積量が大きくなり保たれかのようになり、事業の終了後も起こった1994年の高水位や、1995年の高水位においても、以前のような深刻な被害は発生しませんでした。

湖国の自然と文化

琵琶湖は、わが国最大の淡水湖であり、動植物の宝庫です。四季それぞれに桜、紅葉、雪などに彩られて人びとを惹き、夏はマリンスポーツのメッカとして盛んになります。“湖に近く渋滞のある国”として名づけられた近江地方は、湖をめぐるかな自然と美しい風景、数々の歴史や文化財に恵まれています。

自然・景勝地

生物

ニゴロブナ、グンゴロウブナ、ホンモロコ、ヒラコトオナミなどの琵琶湖でしか見られない固有種をはじめ、約100種類の魚介類が生息しています。鰐類ではカツオブナ、カモ、マグロ、コクチヌウ、ヒシクイなど水産物を駆い、人びとに驚くほど安らぎを与えていました。

歴史・文化

城跡・史跡

井伊直弼(後の徳川)が完成させた彦根城、鍋田信長城の安土城跡など、また賤ヶ岳、鷹爪の古戦場などが戦国時代の歴史を物語ります。

湖国の祭り

重要無形民俗文化財の長浜八幡宮の曳山祭り、多賀大社の万灯祭、日吉大社の三王祭などが有名です。

寺院

湖を抱く多くの寺が点在しています。十一面観音で有名な渡月寺のほか、若狭山脈にむかう寺西寺、金剛寺、百濟寺は、いずれも天台宗の名刹で、蓮華三山と呼ばれており、紅葉の名所としても有名です。源氏の曾我兄弟が祀られる石山寺、三井の俄羅寺で有名な三井舟などがあります。

近江商人

近江は、古来から北陸道、中山道、東海道など主要な街道が集まっていたことから商業が栄え、全国にその名を轟せた近江商人が生まれました。近江八景市の琵琶湖や町並みなどに当時の面影がしのばれます。

(七) 日吉水庫管理所一日吉水庫

日吉ダムの概要

- 周辺の山とダムが調和し、威圧感のない見た目に優しいダムです。
- 日吉ダムは「地域に開かれたダム」に指定されており、ダム湖周辺の整備の促進と、地域の活性化を目指し、水源地域と一体となって取り組んでおります。
- 貯水池周辺には毎年約90万人の来訪者があり、安らぎと憩いの場として利用していただいております。



日吉ダムの位置

琵琶湖の西方に位置しており

京都市内から車で約1時間程度です。



日 吉 ダ ム 全 景



ダム諸元		貯水池諸元	
位形	重力式コンクリートダム	集水面積	290km ²
堤高	67.4m	湛水面積	2.74km ²
長	438m	総貯水容量	6,600万m ³
積	約67万m ³	有効貯水容量	5,800万m ³
天端標	EL. 205.4m		

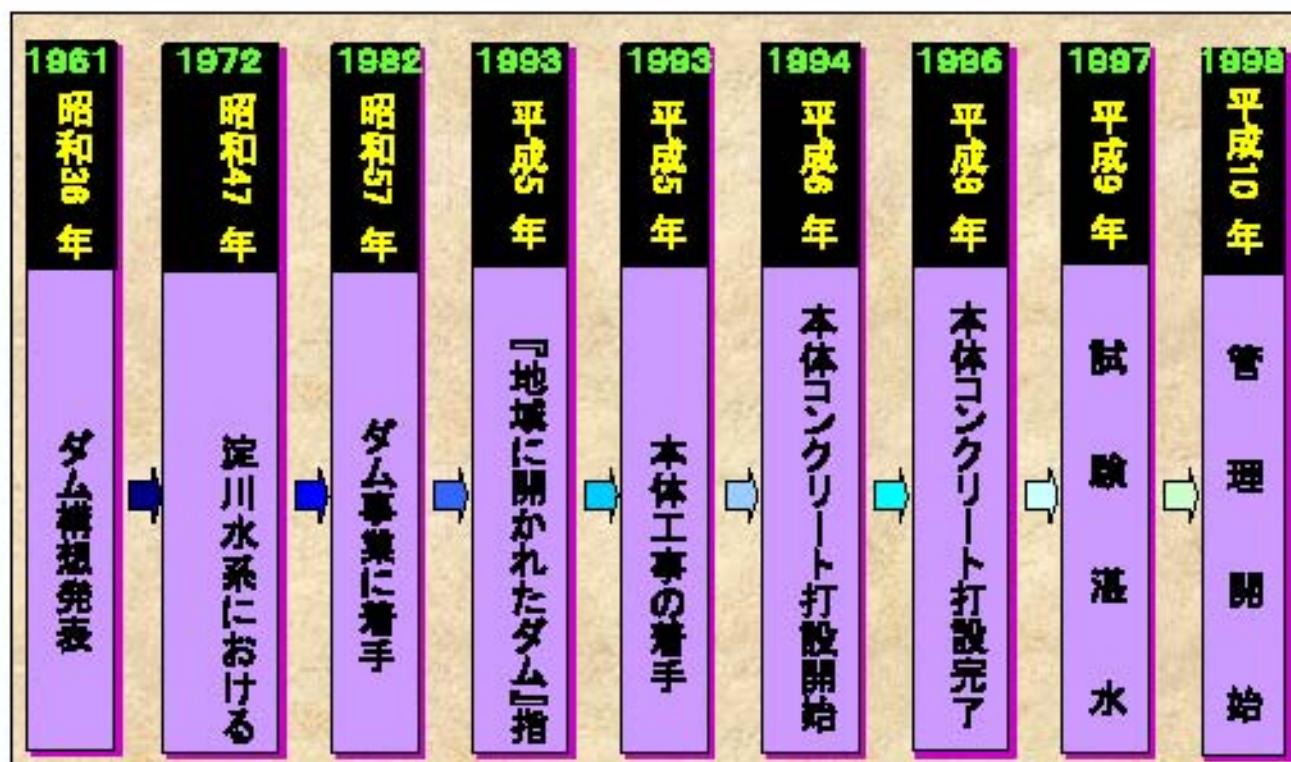
桂川と日吉ダムの位置

桂川の総延長は114kmあり、日吉ダムの位置は桂川の中流部で三川（桂川、宇治川、木津川）合流地点から上流に約55kmのところに位置しています。
桂川の源流は、京都市左東区広河原で、亀岡市で大きく迂回し、嵐山付近でまた京都市内に戻ってくる珍しい川となっております。

日吉ダムの概要

事業の経緯

日吉ダム建設事業費 総額1,836億円(H6P)



日吉ダムの目的

- 洪水調節を行い、洪水被害を軽減する。
 - ・洪水を一時的に貯めて、洪水による下流域の被害を低減します
- 河川環境の維持、農業用水の安定取水及び舟運の確保を図る。
 - ・貯水池の水を計画的に流すことにより河川環境の維持を図ります
- 新たな水道用水(3.7 m³/s)を供給する。
 - ・京都府を始め、阪神地区の水道用水として供給しています

日吉ダムの役割

水道用水の供給(河川からの取水)



京北町)の一市二町にまたがっています。
貯水池の90%は日吉町になります。
名称は、水没した地域の名前をいただき『天若湖』と名付けられております。

貯水池について

貯水池は日吉町、八木町、京都市(旧



ダムの洪水調節のしくみ

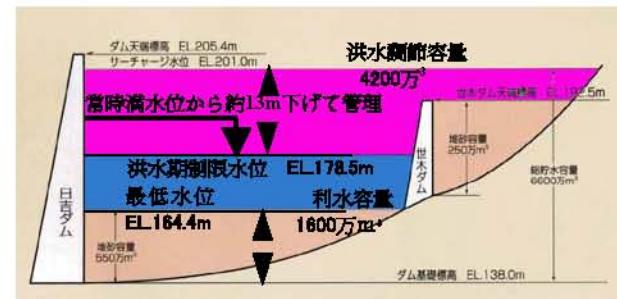
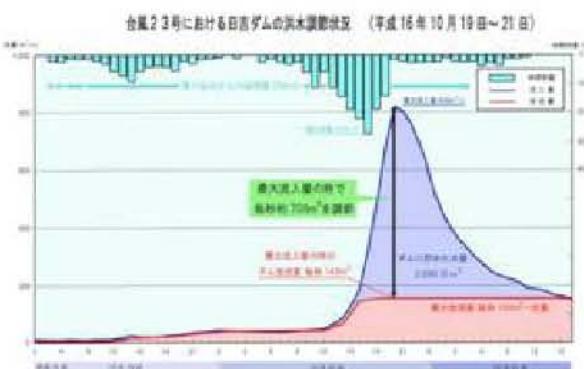
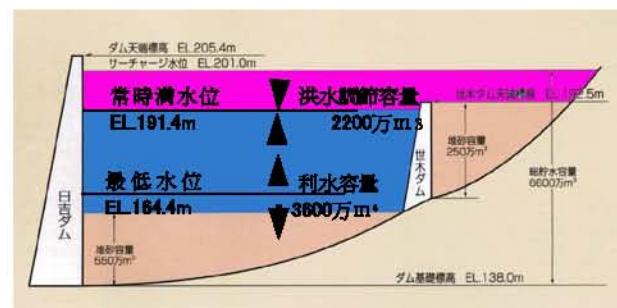


日吉ダムの貯水池の使い方（非洪水期）
10月16日～翌年の6月15日

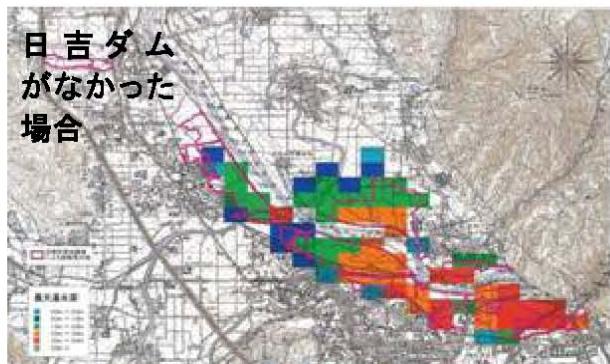


日吉ダムの貯水池の使い方（洪水期）
6月16日～10月15日

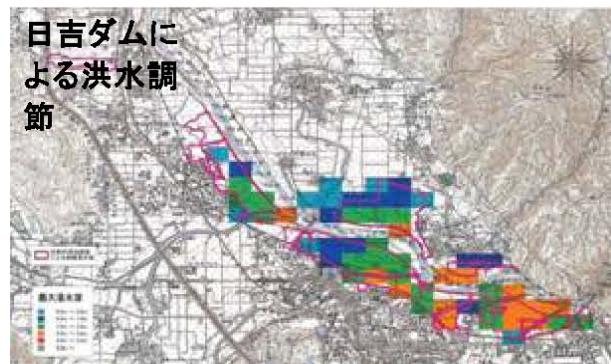
日吉ダムの洪水調節状況（管理開始後最大）



日吉ダムの洪水調節による下流河川の水位低減効果 台風 23 号（平成 16 年 10 月 19 日～21 日）



日吉ダムの洪水調節による下流河川の水位低減効果
台風 23 号（平成 16 年 10 月 19 日～21 日）



亀岡市の洪水（平成 7 年 5 月の出水）



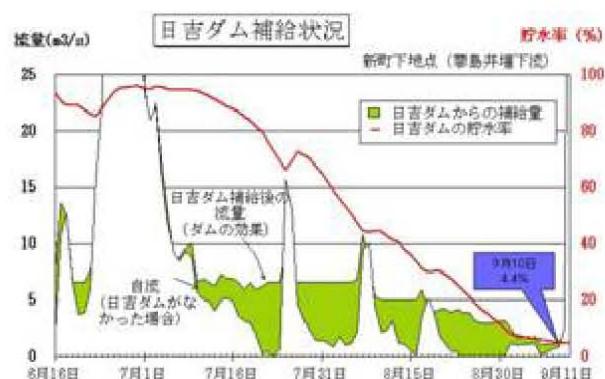
平成 12 年日吉ダムの活躍（平成 12 年夏渴水）

平成 6 年渴水と平成 12 年渴水との比較
平成 6 年渴水（日吉ダム完成前）の桂川月読橋上流部（平成 6 年 8 月 16 日 京都新聞掲載記事）



日吉ダムから補給しない場合は、7月21日～7月24日及び8月23日～8月31日などには瀬切れ（川の流れが途切れる状態）が生じたものと考えられます。

平成 12 年渴水（日吉ダム完成後）の同地点（平成 12 年 9 月 7 日撮影）

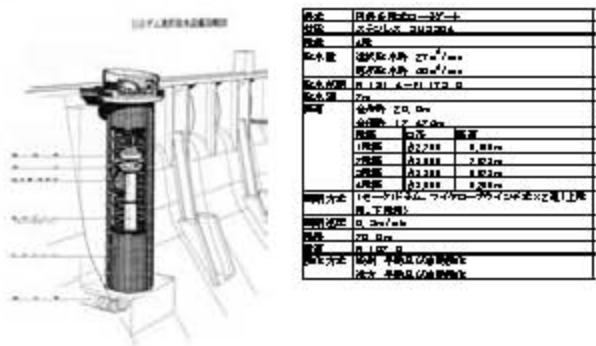


選択取水設備の運用

選択取水設備は夏季の水温上昇に伴う温度躍層により発生する底部の冷水を下流に放流させないため、表層より取水することを目的としています。

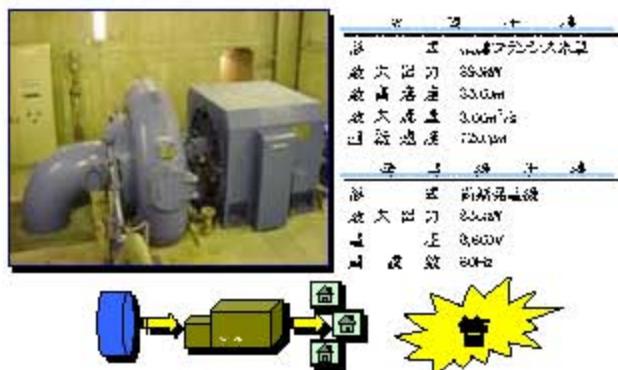
利水放流バルブによる放流状況

- ・平常時や渇水時に使用して放流しています。
 - ・洪水期を迎えるための水位低下時にも使用しています。



管理用水力發電設備

日吉ダムでは、放流水を利用して発電を行っています。



4 宇奈月ダムの諸元



貯水池諸元

河川名	高瀬川(木曽川支流)
最高水位	EL 517.0m
貯水容量	0.875億m ³
貯水率	8.4%
セーフティ水位	EL 390.0m
貯水率(セーフ)	EL 245.0m
溢水門水頭水位	EL 242.0m
溢水門水頭	EL 230.0m
貯水率	24,700,000m ³
貯水率(セーフ)	12,200,000m ³
貯水率(セーフ)	11,000,000m ³
放流水流量	11,200,000m ³ /day
貯水率(セーフ)	10,000,000m ³
貯水率(セーフ)	8,000,000m ³
貯水率(セーフ)	7,000,000m ³

ダム諸元

形式	重力式コンクリートダム
堤体高	EL 262.0m
堤頂	EL 27.0m
堤頂長	190.0m
堤頂幅	8.0m
放流水	1,000 m ³ /s

放流設備諸元

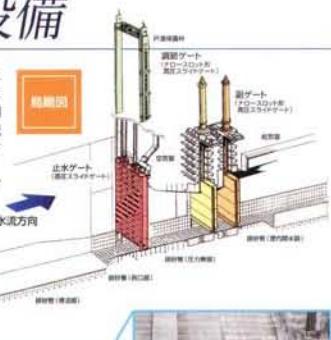
上流端	上流端左岸・右岸各1箇所
下流端	下流端左岸・右岸各1箇所
放流水流量	4,700 m ³ /s

5 UNAZUKI DAM

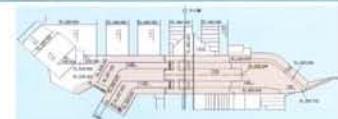
6 排砂設備

貯水池内に流入してくる土砂を下流に排出するため、洪水末期に貯水池を空にして、流れが土砂を運ぶ力(揚流力)を利用して、貯水池に溜まつた土砂を堤体下流へ排出する施設で左岸部に2条設置しています。

また、排砂路には耐耗耗材をライニングしています。



排砂設備平面図



排砂設備標準断面図



排砂時水位低下用放流設備標準断面図



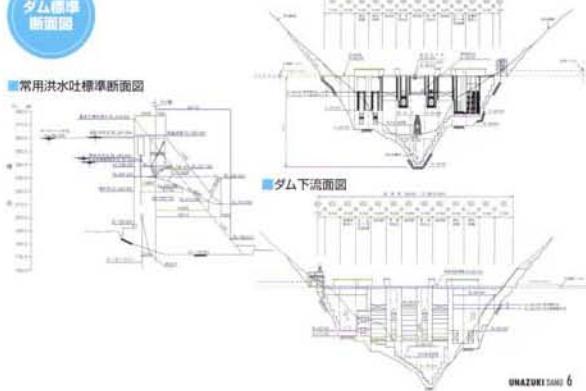
6 UNAZUKI DAM

5 宇奈月ダムの構造

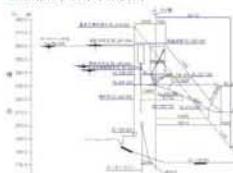
ダム平面図



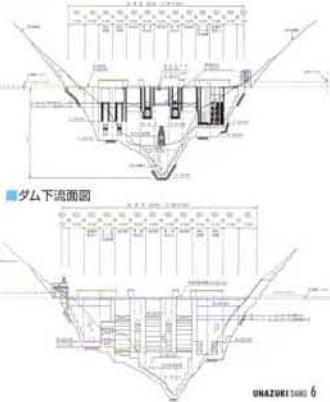
ダム標準断面図



常用洪水吐標準断面図



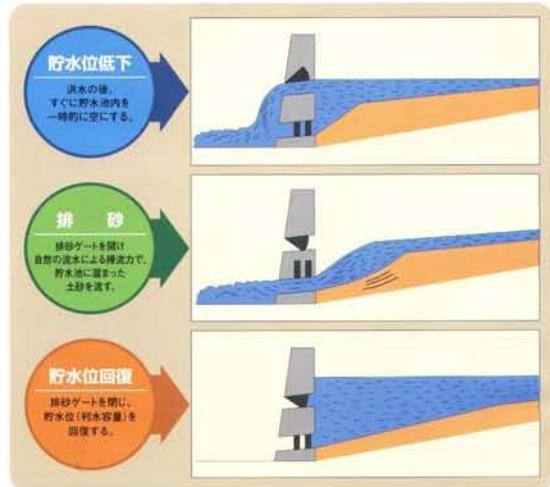
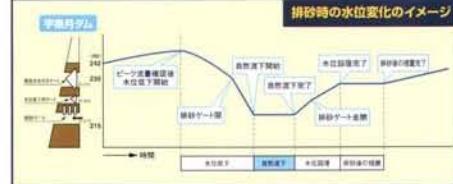
ダム上流面図



ダム下流面図

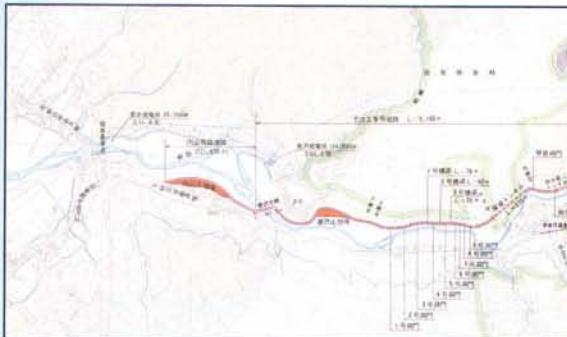
UNAZUKI SAND 6

7 排砂の方法



UNAZUKI SAND 8

8 工事用道路及び主な補償



□ 工事用道路

下流工業用道路	上流工業用道路
区间：首次大橋～ダムサイト	区间：ダムサイト～尾ノ沼谷付近
限界速度	限界速度
F10.km/h	F1.8km/h
シートマッピング	シートマッピング
F1.1km	F0.4km
ADT(年間総走行量)	ADT(年間総走行量)
F30,000t/a (門司方面約7,000t/a)	F30,000t/a
最高積載車	最高積載車
F10.t	F10.t
積載規制	積載規制
第3回車～4回	第3回車～4回
設計速度	設計速度
40km/h → 距離30cm/h	40km/h → 距離30cm/h
限界	限界
1.5m	3.5m



9 UNAZUKI SAN



補償

宇奈月温泉東引湯接付料	
付替料区間	ダムサイト下流地点～湯町温泉集湯槽
付替料金表	約8.2km
トンネル料金表	約6.7km
明り側距離	約1.2km
明り側・暗跡延長	約0.3km



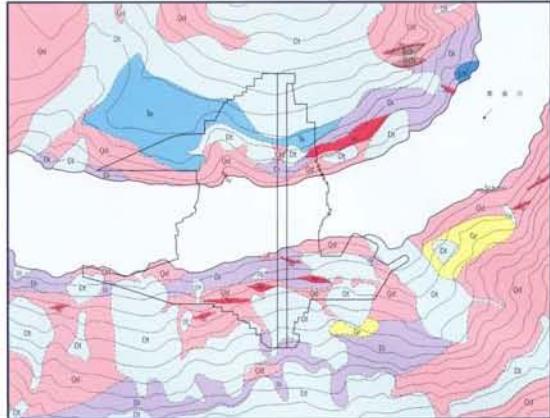
更多資訊請上網：www.singnet.com.hk

付替区间：宇摩月駅～柳原駅手前	
付替距离	约1.7km
トンネル距离	约1.5km(2方向)
明るい距离	约0.5km
複数距离	约0.2km(2端)



ANSWER

9 ダムサイトの地質

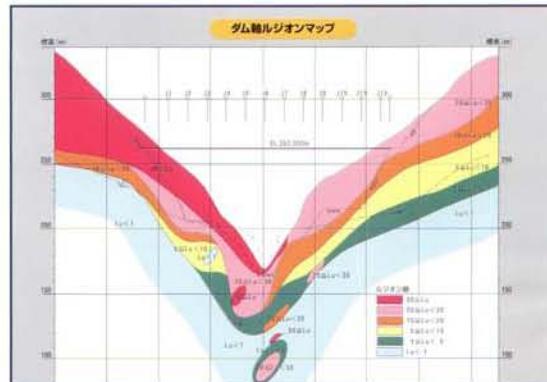
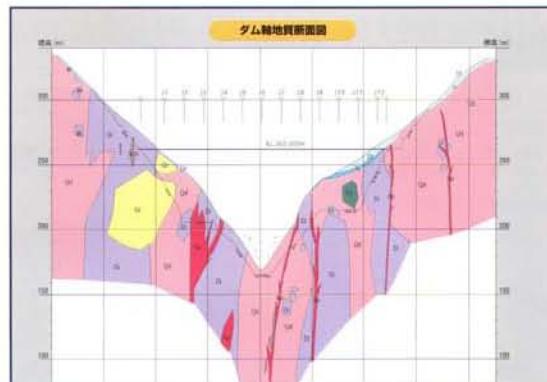


凡例			
種別	地圖上記載名	規格	説明
新	河川床堆積物	A4	過去に河川が運んだ新しい堆積物
生	堆積物	D2	既存の河川堆積物上に形成してある堆積物

代 名	地質 名	成因 名	特徴	Ti	
				段丘面標高	段丘面下の土質・地盤に影響を及ぼす 主要な物理的・化学的作用
中 生 代	アブコイド	堆積	段丘面標高: 海抜約10m 地盤: 砂層、粘土層、アルカリ性 土系(草木繁茂地)	Ab	風化作用による風化・侵食作用
新 生 代	石炭帯堆積	堆積	段丘面標高: 海抜約10m 地盤: 砂層、粘土層、有機物質 混在する泥炭層(黒褐色)	Ch	風化作用による風化・侵食作用

地質学的特徴	成因	主な岩石	特徴
・岩盤の構造が複雑で、断層や褶曲が発達する。	・地殻変動による変成作用	・花崗岩	・花崗岩は、花崗岩質の火成岩であり、その外見は白い花崗岩と黒い花崗岩がある。
・ダム基礎岩盤は、補助花崗岩層によく属する。	・地殻変動による変成作用	・アグマタ系状(佐間岩質岩と变成岩との混成岩)	・アグマタ系状(佐間岩質岩と变成岩との混成岩)は、花崗岩質岩と变成岩の混合した岩層である。
・岩盤の構造が複雑で、断層や褶曲が発達する。	・地殻変動による変成作用	・片麻岩	・片麻岩は、花崗岩質岩と变成岩の混合した岩層である。

中 華 古 文 化	傳 承 傳 統 傳 統 傳 統	傳 承 傳 統 傳 統 傳 統
石英閃綠岩である	一般に堅固で	花崗岩の軟化度、劣化は表層に限られ、風化帯は概ね地表に沿って、薄く分布しています。
風化による岩盤の軟化度、劣化は表層に限られ、風化帯は概ね地表に沿って、薄く分布しています。	堅固性差	花崗岩の軟化度、劣化は表層に限られ、風化帯は概ね地表に沿って、薄く分布しています。
なわ、活断層は、ダムサイト付近において存在	品質評定基準	花崗岩の軟化度、劣化は表層に限られ、風化帯は概ね地表に沿って、薄く分布しています。
	安定性基準	花崗岩の軟化度、劣化は表層に限られ、風化帯は概ね地表に沿って、薄く分布しています。



11

10 宇奈月ダム周辺環境

地域に開かれたダム 【宇奈月ダム周辺の環境整備】

荒削りの自然が残された北アルプスの山々。雄大な里部渓谷の入口には、美しい湖の街、宇奈月。宇奈月ダムの環境整備は、ダム周辺をゾーン分けして、それぞれのゾーンごとにテーマを決め、そのテーマの表現をめざしています。



★環境整備計画(4つのテーマゾーン)



13 UZUKIZAWA

【宇奈月ダム情報資料館】

大夢来館 (だむこんかん)

宇奈月ダム管理所上流棟2F
操作室にあるいろいろな機械は、通称「ダムコン」(ダムコントロールシステムの略)と呼ばれています。

大夢来館は、黒部川流域に大きな夢が来るよう願い、また、ダムに来てほしいという願いも込め、ダムコンにかけて名付けたものです。



①映像シアター



②オーディオのダム探検



展示室



③タッチパネルによるダム探査



④ダムへおいでいる世界



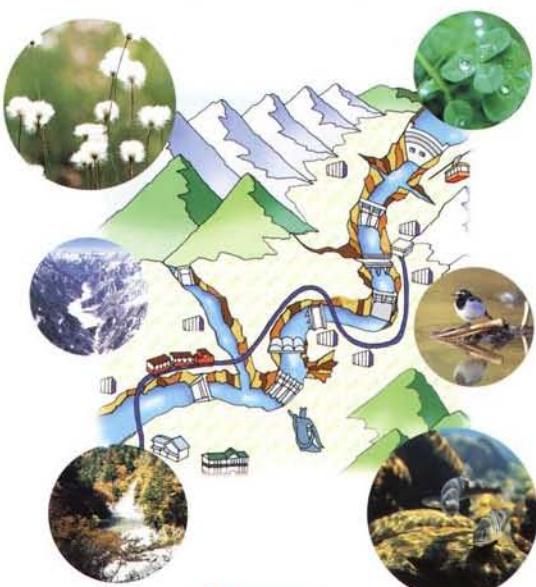
⑤ダム情報センター

UZUKIZAWA 14

(九) 關西電力株式會社一出之平水庫

自然と地域とダムの 豊かな共存をめざして

黒部川「出し平ダム」の排砂について



関西電力

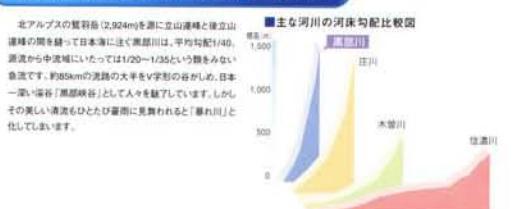


暴れん坊将軍、黒部川

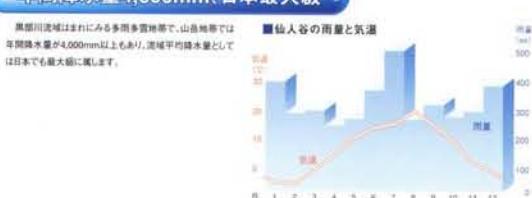
厳しさと豊かさと。数字が実証する黒部川の素顔

雄大な北アルプス連峰から富山湾まで一気に流れ下る黒部川。豊富な水量をたたえた清流は豪爽な渓谷を刻み運ばれた土は日本を代表する耕種地帯を形成し、昔ながら耕作地帯として流域の人々の暮らしを潤していました。
しかし、ひとたび豪雨となると手のつけられない暴れ川と化し、大きな災害を引き起こしてきました。

平均勾配1/40、日本有数の急流河川



年間降水量4,000mm、日本最大級



自然エネルギーの宝

崩壊箇所約7,000、国内トップランク

黒部川の源となる山々は第三紀以降に断層活動を伴って地殻に隆起したもので、浸食作用が美しいのが特徴です。さらに基盤がもろく保水能力の低い花崗岩質でできているため、非常に崩れやすく、上流域の崩壊面積比率はおよそ5%（通常は1~2%）にものぼります。豪雨時には崩壊した多量の土砂が川に流れ込み下流域一帯に多大な被害をもたらしました。

■崩壊面積率比較図



とどまるところを知らない黒部川の土砂

上流域に多くの崩壊地帯が存在する黒部川では、豪雨や融雪により大量の土砂が流出。その量は年間約140万m³と国内でも最大位にランクされ100tラックに換算すると22万台分、ピックな東京ドーム(124万m³)にも入りきらない量になります。



= × 220,000台

東京ドームにも入りきらない
黒部川の年間流出土砂量



崩壊地の実際



黒部川の実際

黒部川の豊かな水量を利用した水力発電

エネルギー資源の80%以上を輸入に頼る日本。しかもその資源の石油・石炭・天然ガスなどには限りがあります。こうした中、純国産として貴重なエネルギーが水力発電です。流量が豊富で河川勾配が急な黒部川はまさに水力エネルギーの宝庫といえます。

エネルギーの安定供給に欠かせない水力

雨水や融けた雪が川へ流れ込む自然の原理を利用した水力発電は、人間に頼ることのない純国産のエネルギー。そして電力需要への即応性や安定性にも優れているという特長があります。今後、電力の安定供給に向けて、火力や原子力など各発電の割合をベストに組み合わせていかずで実績に基づけられた信頼の高い水力発電は引き続き大きな役割を担っています。



黒部川水系最大のダム・黒部ダム

地球温暖化防止にも貢献しています

発電時にCO₂を発生しない水力発電は、他の発電方法と比べても地球温暖化防止という点で優れています。水力発電所は適切に維持・管理・運転することによりCO₂を発生しない電気を少しでも多く発生することが、地球環境の保全にもつながるというわけです。



CO₂

排出量

発電量



黒部川とダムを取り持

河川とダムが共存するための技術、排砂

黒部川のような土砂の流出が多い河川では、ダムにより土砂をせき止めてしまうことにより色々な問題が発生します。これを解決するための技術が堆砂ゲートによる堆砂です。

・出し平ダムの排砂設備・



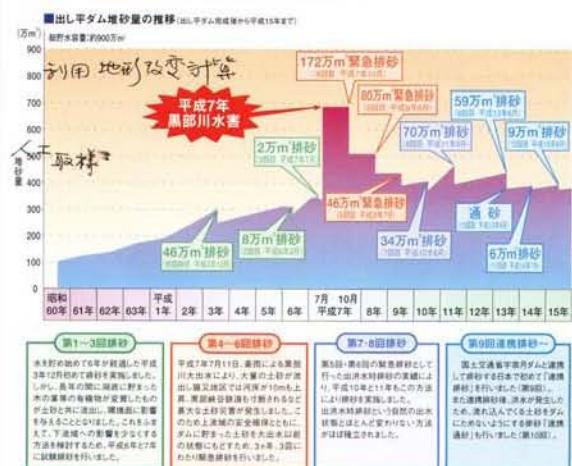
限りなく自然に近い

過去の排砂実績をふまえてよりよい方法を今後も確立していきます

現在まで大雨などの出水時に排水を実施することで、自然の出水状態とほとんど変わりのない方法を確立してきました。今後は土砂を留めないよう適切に排水を行っていくことで、限りなく自然に近い土砂の流れを黒部川において実現していきます。

・開レ平ダムの排砂実績・

昭和60年のダム完成以降、出レ平ダムでは平成15年までに計12回の爆破を行っています。



技術、排砂

- ・自然の力を使う排砂のしくみとは・

排水を行うには、発電を止めて洪水吐ゲートや排砂ゲートから放流することによりダムの水位を下げます。氷を野めた状態では排砂ゲートを開いたとしても野水池内の流れが非常に弱く土砂が動かないためです。そこでダムを空っぽにすることで、河川本来の流れをとりもどし、この力により土砂を排砂ゲートから流下させます。

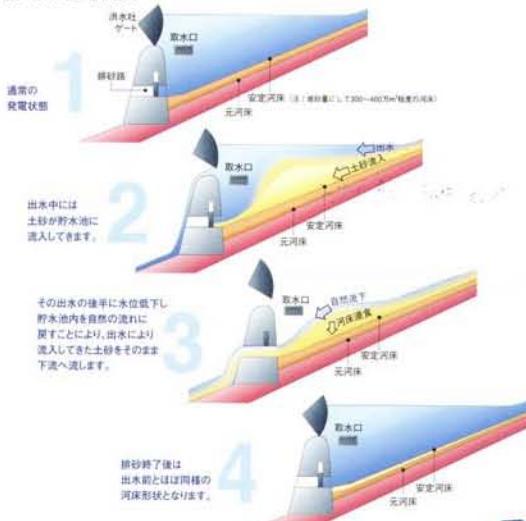


土砂の流れのために

・主砂を貯めないための排水をめさします。

荒川田流域では大量の土砂が発生しますが、その90%以上は5~8月の出水時に集中してダムに流入してきます。今後はこの出水時に流入する土砂をダムで留めることなくそのまま下流に流すことにより、野川池内の安定河床を維持していくことをめざします。いよいよ開拓した土砂を出すところまでの工程の実施に伴い、地理上の位置等により既存の水路が閉鎖されることがあります。

■上級自動に近い機械学習





環境を見守るまなざし

排砂にあたっては徹底した環境モニタリングを実施

排砂によって流域の環境や富山湾の漁業、さらに黒部川での漁業や農業へ影響を及ぼすことがないように、徹底した環境調査を実施しています。

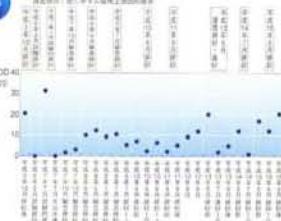
※常 汎用調査(基準)

・通常の操作で環境への影響を少なく

ダム底に堆積した土砂は長い年月でおくと変質するおそれがあります。通常的に操作することが変質を防ぐ最良の方法といえます。そしてもちろん、ダム湖底質の調査も入念に行っています。



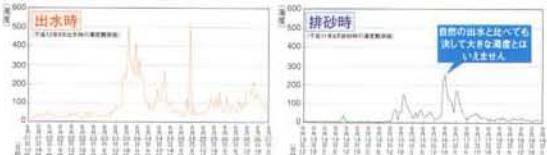
■出し平ダム底質調査(平成3年8月～)



・自然の出水と変わらない濁り具合

排砂時には河川や海域の水の濁り状況も、きめ細かくモニタリングしています。たとえば河口200m沖合の濁り具合をみると、排砂時の濁り具合は自然の出水時と比較しても大きなものとはいえないことがわかります。

■河口200m沖合の濁度比較(実測)



もしっかりと

・豊富な調査地点で詳細にチェック

環境への影響をきめ細かく把握するために、下流域の水路において数多くの調査ポイントを設置。川・海の水質や底質、水生生物の生息状況、地下水にいたるまで総合的にチェックし、調査データを蓄積しています。

■環境調査地点(平成15年度実績)



・客観的な評価のために専門機関も設立

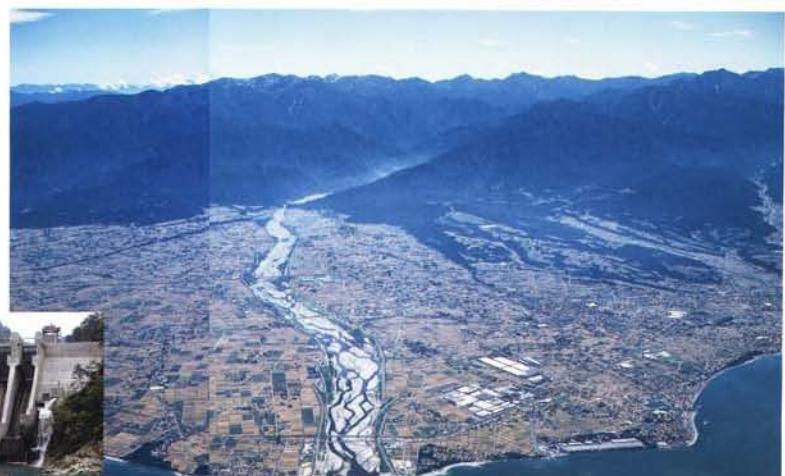
平成10年に学識経験者などで構成された「黒部川ダム総合評価委員会」が設立され、環境調査データを評価いただくなど、排砂による影響について客観的な立場から助言をいただいております。また黒部川の土砂管理のあり方にについて総合的に把査し、地元と協議しながら適切に行っていくために「黒部川土砂管理協議会」も設立され、宇奈月ダムとの連携排砂など今後の課題について協議や調整が行われています。



総合的な土砂管理の視点から

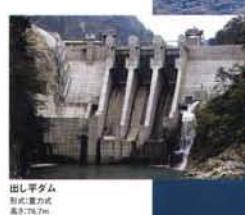
出し平ダムと宇奈月ダム 2つのダムが手とりあって

利水や治水を行ながら、黒部川において川から海にいたるまでの環境を保全していくためには、ダム個別の対策ではなく、黒部川全体での総合的な土砂管理が必要となります。こうした観点から出し平ダムと宇奈月ダムでの連携排砂が行われます。



・連携排砂のしくみ

出し平ダムと約7km下流の宇奈月ダムが、出水時に連携して排砂を行うもので、出し平ダムで排砂された土砂をそのまま宇奈月ダム下流へと通過させています。出し平ダムと宇奈月ダム双方の機能を維持するとともに、上流域での土砂堆積を削減するだけでなく、下流域での河床低下や海岸の浸食などを防ぎます。



■連携排砂のしくみ



・バランスのとれた土砂管理をめざして

関電では出し平ダムで培ってきた排砂技術を駆使しながら、今後もダムと川とのよりよい関係を追求してまいります。また世界的にも譲れるような貯水池の土砂管理に向けていっそう努力してまいります。

(十) 水資源機構本部

2005年10月5日
水資源機構

資料一覧

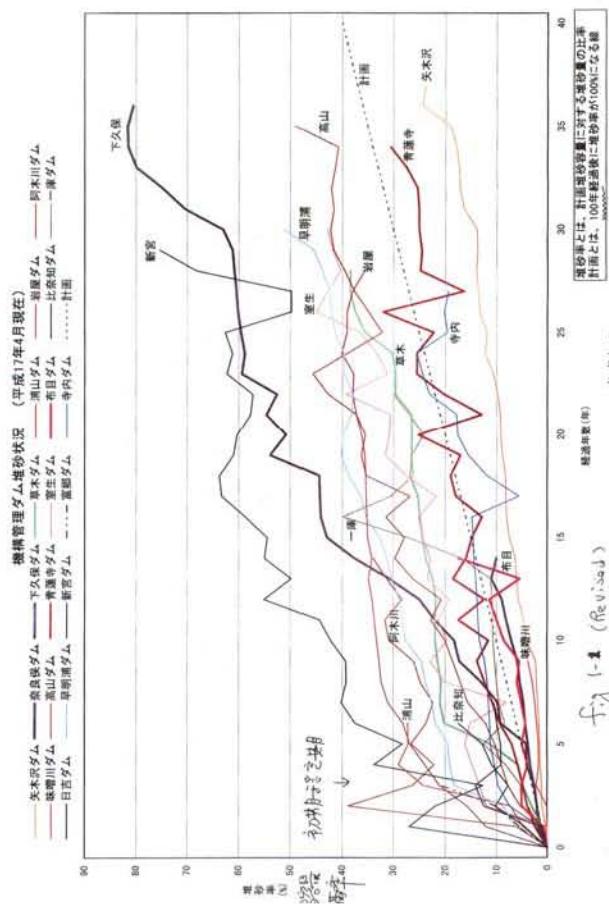
(文献)

- 水資源開発公団：ダムの堆砂の現状と対策、1999.11.（抜粋）
 谷田：ダムの堆砂対策に関する取り組みと今後の課題、ダム技術 No.200、
 2003.5.
 久保田・木戸：ダム下流の流砂系保全に向けた取り組み事例と今後の方向性、土砂管理とダムに関する国際シンポジウム、2005.10.
 小川・金山：土砂掃流試験によるダム下流河川環境改善の取り組み、土砂管理とダムに関する国際シンポジウム、2005.10.

（補足資料）

- 地質調査所：日本の先新第三紀地質構造区、日本地質アトラス、1982.9.
 水資源機構資料：管理ダムの堆砂状況（2005年4月現在）
 * : 堆砂ダムの例（写真）

以上



議者の指導・助言を得ながらモニタリング調査を実施する。

1.1. モニタリング調査計画

土砂掃流試験による下流河川への影響を評価するため、平面形、横断形、河原、河岸植生、魚類、底生動物について次のモニタリング調査を実施する予定である。

平面形については、ヘリコプターによる空中写真撮影を実施し、この写真上にみお筋、河原、河岸植生（相親植生）などを集約して、視覚的かつ経年的な変化を捉えることでのける環境基礎情報図（写真）を作成し、総合的な資料とする。

また、治水上の安全性の観点から溢水に対して監視をする断面については、横断測量を実施し河積の変化を把握する。

インパクトレスポンスの生物指標として、魚類及び底生動物について調査を実施する。魚類は、有識者及び漁協関係者へのヒアリングを行った結果、アユ、ウグイ、カジカ、底生魚を調査すべき種として選定した。底生動物については、定性的な調査結果をもとに水生昆虫類の生活型区分並びに摂食方法による分類を行い、底生動物の様み場環境の変化から河床環境の評価を試みる。

1.2. おわりに

貯水池機能維持のための堆砂対策は多くの管理ダムにおける課題となっている。堆砂をコンクリート骨材としてリサイクル活用を図るなどの従来の対策に加え、堆砂を活用してダム下流の河川環境改善に資する取り組みは、ダム管理における堆砂対策として極めて有効な手段と考えている。

* 1 下久保ダム管理所 所長
 * 2 下久保ダム管理所 主幹

土砂掃流試験によるダム下流河川環境改善の取り組み

独立行政法人水資源機構下久保ダム管理所 小川 浩^{※1} 金山明広^{※2}

1. はじめに

下久保ダムは独立行政法人水資源機構が管理する多目的ダムで、洪水調節、流水の正常な機能の維持、新規利水（生活用水、工業用水）、発電を目的としている。ダム管理開始から36年が経過しており、ダムに流入する堆砂対策として実施する貯水池機能維持対策と、ダムの土砂捕捉によるダム下流河川の河床低下対策などが課題となっている。

特に下久保ダム下流の約1.5km区間は、国の文化財「名勝及び天然記念物 三波石峠」に指定されいる景勝地で、この区間ににおいて河床低下や砂州の消失、クレンジング効果（流砂が当たり石を磨き削る効果）の低下等による景観変化が顕在化していた。

本報文は、2003年から実施してきたダム下流河川の景観対策としての土砂掃流試験と、ダム下流河川の環境保全対策及び貯水池機能維持対策としての土砂掃流試験の取り組みについて報告するものである。

2. 下久保ダム運用による神流川流砂系への影響

下久保ダムは利根川水系右支川神流川に位置し、ダムの流域面積は323km²と神流川全体^②の流域407km²に対し79%を占めている。また、河床材料を生産する山地部の流域面積は374km²で、実にその86%をダム流域が占めていることとなる。

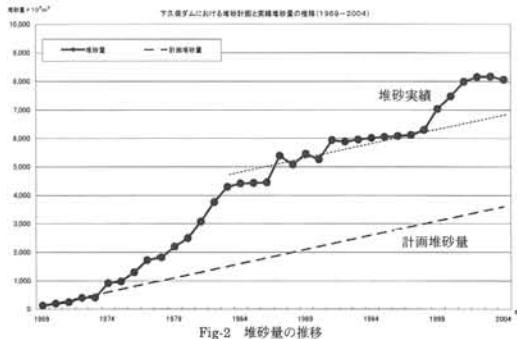
下久保ダム貯水池への堆砂によりダム下流の流砂系の連続性が失われ、下久保ダム～扇状地扇頂部までの区間では激しい河床低下現象が生じており、ダム建設前の写真から判断すると約5mほど河床が低下している区間もある。また、ダム直下流では河床材料の粗粒化がみられ、三波石峠では河原が消失するなどの景観障害が生じている。



Fig-1 神流川と下久保ダム流域図

3. 下久保ダム貯水池への堆砂の状況

下久保ダムは1969年の管理開始後36年が経過し、比較的大規模な出水時に貯水池への堆砂量が急激に増加する傾向を示しており、2004年末の堆砂量は $8,057 \times 10^3 \text{ m}^3$ で、計画堆砂容量 $10,000 \times 10^3 \text{ m}^3$ に対し81%、2.2倍の進行速度となっている。

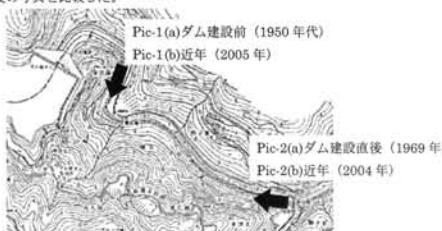


4. 三波石峠の現状と土砂掃流試験の目標

下久保ダムが流砂系を遮断したことにより、三波石峠に景観障害が生じている。

- ① 河床低下、河床材料の粗粒化、河原の消失
- ② クレンジング効率の低下

河原が失われた状況や河床低下量を把握して景観改善目標を設定するため、ダム建設前の写真を比較した。



せようとするものである。なお、貯砂ダムは下久保ダム上流8.5kmに位置し、洪水期(7月～9月)に制限水位(E.L.283.8m)を迎えると堆砂の採取が可能となる。



Pic-5 ダム放流による土砂流下

Pic-6 河床へ堆積



ダム建設前の三波石峠Pic-1(a)は河原が存在しているが、ダム完成後は出水時に河床材料が補給され河床低下を続け、近年Pic-1(b)では河原が失われている。また、ダム完成直後Pic-2(a)と近年Pic-2(b)を比較すると、巨石の比較と現地調査により河床低下量は2m程度と推定することができる。これらのことから、河原の消失に対しては河原の再生を、河床低下に対しては2m程度の河床の回復を景観改善目標(河原の再現目標)とする。

なお、クレンジングについては土砂掃流試験前後の写真撮影によりその効果を把握する。

5. 土砂掃流試験方法

2003年度から実施している土砂掃流試験は、下久保ダム貯水池内の貯砂ダムにおいて堆砂土砂を採取し、ダンプトラックでダム下流まで運搬・投入、ダムからの放流時に流下さ

6. これまでの土砂掃流実績

第1回目(2003年7月16日投入)は、2003年7月の前線による出水に伴うゲート放流(7月26日夜半から最大放流量約 $100 \text{ m}^3/\text{s}$ =約5時間)により、約 $1,000 \text{ m}^3$ の土砂が流下した。

第2回目(2003年10月22日投入)は、2004年台風22号の出水に伴うゲート放流(2004年10月10日～10月15日、最大放流量約 $40 \text{ m}^3/\text{s}$ =約9時間)により、約 200 m^3 の土砂が流下した。その後、2004年台風23号の出水に伴うゲート放流(2004年10月19日～10月26日、最大放流量約 $300 \text{ m}^3/\text{s}$ =約2時間)により、前回の放流時に残存していた約 800 m^3 の土砂が流下した。

第3回目(2005年3月25日投入)は、約 $2,000 \text{ m}^3$ の土砂を投入した。今回は小規模の放流でも土砂が流下するよう、河道中心まで押し出す投入形状とした。その後、2005年5月8日のクレストゲート点検放流(約 $5 \text{ m}^3/\text{s}$ =約1時間)により、若干ではあるが流下している。

年月日	投入土砂量(m^3)	放流要因	最大放流量(m^3/s)	流下土砂量(m^3)
投入 2003. 7.16	1,000	月刊作業計画		
流下 2003. 7.26		前線	約 $100 \text{ m}^3/\text{s} \times 5\text{時間}$	約 $1,000 \text{ m}^3$ 無
投入 2003.10.22	1,000			
流下 2004.10.10～15		台風22号	約 $40 \text{ m}^3/\text{s} \times 9\text{時間}$	約 200 m^3
流下 2004.10.19～26		台風23号	約 $300 \text{ m}^3/\text{s} \times 2\text{時間}$	約 800 m^3
投入 2005. 3.25	2,000			
流下 2005. 5. 8		点検放流	約 $5 \text{ m}^3/\text{s} \times 1\text{時間}$	若干

Fig-4 土砂掃流試験の経過



7. 河原の再生

これまで流下した土砂により、土砂投入地点から下流にかけて河原の再生が認められる。しかしながら、再生した河原も現在の投入量と投入方法では洪水量～計画最大放流量(500m³/s～800m³/s)を経験した場合、再び流失してしまうものと懸念される。

今後は、ダム放流量と放流継続時間に対応した土砂の投入形状及び投入量を検討する必要がある。



Pic-9 土砂掃流開始前の河道 (03.07)



Pic-10 現在の河道 (05.07)

※ 河道内に河原の再生が認められる。

8. クレンジング効果

土砂掃流により流水に砂礫を混入させたため、クレンジング効果が向上したものと考えられる。写真(Pic-11,12)は、土砂掃流試験前後の写真である。黒ずんでいた三波石がクレンジングにより新鮮な表面を表している状況が判る。



Pic-11 1997年の三波石



Pic-12 2004年の三波石

また、クレンジング効果は水衝部となる巨石の上流側より、不規則な流れにより流砂を捲き込む下流側の方が大きい。写真(Pic-13,14)は、巨石の上下流面の状況であり、クレンジング効果が格段に異なることが判る。写真(Pic-15)は、巨石を側面から見たものである。



Pic-13 下流面



Pic-14 上流面



Pic-15 側面

9. 土砂掃流試験の効果

2003年から実施している土砂掃流試験は、三波石峠の一部で河原の再生及びクレンジング効果により景観の改善が認められる。

しかしながら、河床低下対策については、ダム放流量と放流継続時間によっては再生しないため河原が再び流失してしまうことが懸念されるため、今後も引き続き検討が必要である。

クレンジングは、土砂掃流を継続することによって恒久的な効果が期待できるものと考えられる。

→ なお、この試験結果は定期的に地域住民に対し報告しており、地域住民からは景観改善効果について理解と好評を得ている。

10. 貯水池機能維持対策としての土砂掃流試験

下久保ダムでは、2005年度から継続的かつ恒久的な貯水池機能維持対策を視野に入れた土砂掃流試験の実施を予定している。この土砂掃流試験実施にあたっては、総合的な土砂管理対策としてダム下流河川の環境保全（流水の正常な機能の維持、動植物の保全、人と自然の豊かなふれあい）を目的とした河川管理とダム貯水池機能維持の両面からの必要性と課題を整理し、この課題を関係者間で共有するため、「神流川土砂掃流会議」を設置し河川管理者、沿川利水者、漁業関係者等との緊密な連携を図ることとしている。

また、この会議に提供する資料として、土砂掃流による効果を定量的に把握するため有



写真-1 浦山貯砂ダムの状況 (下流から上流を望む)

1999建



写真-2 浦山貯砂ダムの採取試料 (U1-2地点)

ため、河床に岩着きせずに堆積土砂を基礎とする「フローティングタイプ」の設計を行うものとし、基礎の変形に対する耐久性、施工性及び建設費等について比較検討し、「鋼製枠構造方式」を採用するものとした。比較検討の内容については表3-4に示す。なお、鋼製枠構造方式ダムの設計については、鋼製砂防構造物設計便覧の不透型ダム設計に基づいて行った。

(9) 魚道の設置

下久保ダム貯水池を含む神流川沿川はアユ等の釣りのスポットになっており、平成7年度に公団がダム貯水池内で実施した調査(河川水辺の国勢調査)においても、アユをはじめ多くの魚類の生息が確認されている。下久保ダムでの貯砂ダムの設置にあたっては、貯水池が貯砂ダムに分断されることに伴う魚類の上下流への影響を最小限にするため、魚道を設置するものとした。設置位置は河川のみお筋である右岸側とし、平面形状は現地形に合わせた。魚道型式は、実績の多い「階段式」を採用することとした。また、魚道内が土砂で埋没したときに土砂の排除を容易にするため、各ブール間の隔壁を木製とし、土砂除去時には壊せる設計としている。

6) 堆積土砂の材質

昭和55年3月に貯水池上流部で行った堆積土砂の粒度試験結果は表3-5のとおりであり、コンクリート用骨材として使用しても問題のないものである。

表3-5 堆積土砂の粒度分布

テスト ビット % #	玉石 %	礫 %	砂 %	345-粘土 %	最大径 mm	605径 mm	10%径 mm	均 等 係数	粗粒率 %	備考
1 上部	5	39	55	1	80	5.7	0.42	13.6	4.99	
下部	11	37	50	2	256	7.0	0.42	16.7	5.31	
2 上部	48	31	19	2	283	5.0	0.58	86.2	7.41	
下部	37	38	23	2	203	35.0	0.64	54.7	6.96	
3 上部	23	22	54	1	224	8.0	0.40	20.0	5.39	
下部	21	27	51	1	213	8.0	0.37	21.6	5.38	
4 上部	29	47	22	2	216	23.0	1.50	15.3	6.90	
下部	26	42	31	1	303	21.5	0.86	25.0	6.60	
5 上部	11	40	49	0	207	7.8	1.30	6.02	5.86	
下部	40	40	18	2	199	40.0	1.60	5.0	7.34	
6 上部	21	30	47	2	173	9.3	0.52	17.9	5.69	
下部	30	32	37	1	306	20.0	0.66	30.3	6.40	
平均	25	35	39	1	222	—	—	27.5	6.19	

(玉石: 40mm以上、礫: 50～40mm、砂: 0.15～50mm、345-粘土: 0.15mm以下)

7) 工事の概略工程

工事は、まず進入路工事を実施した。その後、H8～9年度に設計を行い、H10～11年度には構工部分のみ工場製作を行い、H12年度にダム本体工事一式を実施する計画である。



写真-3 阿木川貯留ダムの状況（下流側左岸から上流を望む）



写真-5 岩村川貯留ダムの状況
(貯留ダム直上流の陸化箇所、写真上方の吊り橋付近が貯留ダム)



写真-4 阿木川貯留ダムの採取試料（A2地点）



写真-6 岩村川貯留ダムの採取試料（II-2地点）



写真-7 味噌川貯砂ダムの状況（上流左岸側から右岸を望む）



写真-9 布目副ダムの状況（上流から副ダム堤体を望む）

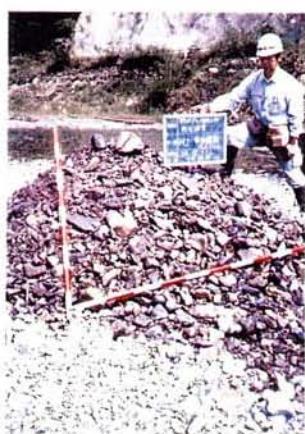


写真-8 味噌川貯砂ダム採取試料（M2地点）



写真-10 布目副ダム採取試料（N1地点）

3.2 調査方法

高山ダムにおけるフラッシュ放流の最大放流量は $40\text{m}^3/\text{s}$ (調査地点における流速 $0.78\sim 0.87\text{m}/\text{s}$)、比奈知ダムにおいては $20\text{m}^3/\text{s}$ (調査地点における流速 $0.94\sim 1.10\text{m}/\text{s}$) で行った。調査内容は、砂礫移動調査、付着藻類調査等である。高山ダムにおける調査範囲は下流約 10km まで、比奈知ダムは下流約 5km (青蓮寺川合流地点) までとした。

3.3 調査結果

高山ダムにおける調査結果は次のとおりである。

- ・土砂移動調査では最大粒径約 26mm の砂礫の移動が確認された。
- ・クロロフィル a の測定結果は特に大きな変化は見られず、フラッシュ放流による藻類の剥離は確認できなかった。但し、藻類をタイプ別に観察すると、優占種の入れ替わりが見られ、河川環境の変化が起きていることが分かった。
- ・比奈知ダムにおける調査結果は次のとおりである。
- ・土砂移動調査では最大粒径約 10mm の砂礫の移動が確認された。
- ・クロロフィル a の測定結果は、高山ダムと同じく特に大きな変化は見られず、フラッシュ放流による藻類の剥離は確認できなかった。但し、図-4 に示すように、放流前後でクロロフィル a とフェオフィチン a の割合を調査した結果、クロロフィル a の占める割合が増えた傾向がみられた。これは、藻類が死ぬとクロロフィル a はフェオフィチン a に変化することから、藻類が活性化したことを意味すると考えられる。

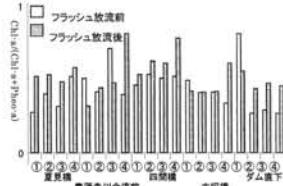


図-4 フラッシュ放流前後の付着藻類活性化比(比奈知ダム)

4. 土砂拂流による効果事例(阿木川ダム、一庫ダム、浦山ダム、下久保ダム)

4.1 阿木川ダム¹⁾

4.1.1 ダムの概要および実施目的

阿木川ダムの概要を表-2 に示す。ダム下流の河川環境に關し、地域住民や学識者から次のような意見が提出されている。

・ダム直下流における河床構成材料の粗粒化
・鮎の育成のために付着藻類の更新が行われるよう砂を拂流すること。
以上より、2004 年から貯留ダム(阿木川ダム貯水池上流に位置する水質保全用ダム)に堆積した土砂をダム下流河川に還元する取り組みを開始した。また、これに先立ち、現地にて、図-5 に示す付着藻類衝突剥離実験を行い、石礫に付着している藻類に砂礫混入水を衝突させ、その剥離に関する定量的な資料を得ている。ここではこの実験結果について紹介する。

表-2 阿木川ダム流域概要

ダム名	阿木川ダム
河川名	木曾川水系 阿木川
阿木川の流域面積	1335km ²
ダム貯留地点からの経過年数	11 年
ダムの位置(木曾川合流点までの距離)	8.0km
ダムの集水面積	81.8km ²
ダム付近の河川状況	
河床勾配	約 1/80
ダム流入量(平水量)(2002年)	1.61m ³ /s
ダム放流量(平水量)(2002年)	1.74m ³ /s



写真-3 阿木川ダム

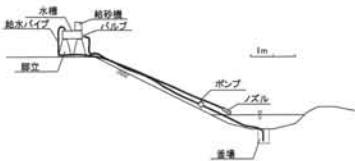


図-5 付着藻類衝突剥離実験装置配置

4.1.2 付着藻類衝突剥離実験

実験ケースは、流速 $1\text{m}/\text{s}$, $2\text{m}/\text{s}$, $3\text{m}/\text{s}$ に対して土砂濃度を変化させ、その時の付着藻類の剥離率を比較した。今回の実験結果を図-6 に示す。このことから以下の傾向が見られる。

- 流速ごとに見ると、流込み(土砂濃度 0%) の時より土砂を含んだ方が藻類を剥離している。
- 流水のみであると、剥離率は流速の大小にあまり影響していない。
- ある土砂濃度で剥離率のピークが見られる。

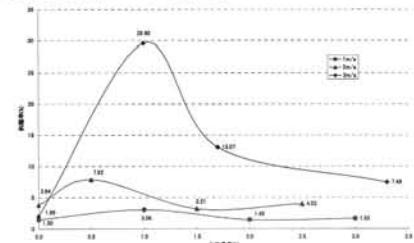


図-6 付着藻類衝突剥離実験におけるクロロフィル a の剥離率

4.2 一庫ダム²⁾

4.2.1 ダムの概要および実施目的

一庫ダムの概要を表-3 に示す。猪名川は、かつては都市に近い少ないアユ釣り場として有名であった。そのため、ダム下流住民からは、かつてのように魚が多く住む川へ復元したいという強い要望がある。そこで、ダム下流に魚類の産卵場となる土砂を供給し、河床に付着している藻類等を更新するため、土砂投入とフラッシュ放流を実施している。なお、この取り組みは、ダム下流の漁業協同組合、地元NPOや自治会および学識者、関係機関、一般住民も参加した意見交換会の中で議論しながら進めている。

表-3 一庫ダム流域概要

ダム名	一庫ダム
河川名	淀川水系 猪名川支川
一庫ダムの流域面積	13.3km ²
ダム建設開始からの経過年数	22 年
ダムの位置(猪名川合流点までの距離)	5.0km
ダムの集水面積	115.1km ²
ダム直下流の河川状況	
河床勾配	約 1/200
ダム流入量(平水量)(2002年)	0.65m ³ /s
ダム放流量(平水量)(2002年)	1.43m ³ /s



写真-4 一庫ダム

4.2.2 調査方法

ドローダウン時の放流を利用し、フラッシュ放流により最大 $20\text{m}^3/\text{s}$ 放流を行った。投土砂は下流の河川工事から排出された河床砂礫とし、放流量が $20\text{m}^3/\text{s}$ で冠水するように敷き均した。調査範囲はダム下流約 5km (猪名川合流地点) までとした。主な調査内容は、付着藻類調査である。

4.2.3 調査結果

ダム下流では、フラッシュ放流により繁茂している藻類等を剥離する効果が得られた(写真-5)。

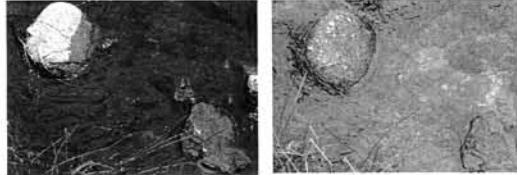


写真-5 フラッシュ放流前(左)と後(右)の下流河床状況変化

4.3 浦山ダム³⁾

4.3.1 ダムの概要および実施目的

浦山ダムの概要を表-4 に示す。浦山川には、ウグイ等の魚類が生息し、川沿いのキャンプ場等では釣りの対象となっている。また、ウグイは粒径 $2\sim 4\text{cm}$ のきれいな砂礫のある河床を産卵場として好む。

そこで、浦山ダムの下流河川における河床構成材料の粗粒化を防止し、魚類の生息・生育環境を保全するため、貯水池上流端の堆積土砂をダム下流に投入した。

表-4 浦山ダム流域概要

ダム名	浦山ダム
河川名	淀川水系 浦山川
浦山川の流域面積	59.8km ²
ダム建設開始からの経過年数	6 年
ダムの位置(猪名川合流点までの距離)	約 2.3km
ダムの集水面積	51.6km ²
ダム直下流の河川状況	
河床勾配	約 1/80
ダム流入量(平水量)(2002年)	1.01m ³ /s
ダム放流量(平水量)(2002年)	0.72m ³ /s



写真-6 浦山ダム

4.3.2 調査方法

投入土砂が魚類の産卵場の河床構成材料として利用されているか、トレーサーを用いて調査した。また、投入土砂は貯水池上流端に堆積したものを用い、出水時に随時下流するようにした。

調査範囲はダム下流 2.3km (荒川合流地点) までとした。

4.3.3 調査結果

投入土砂の混入した河床でウグイの産卵が確認された(写真-7)。産卵場を維持するためには土砂投入が有効な対策と考えられる。



写真-7 投入された砂礫で形成されたウグイの産卵床

4.4 下久保ダム⁴⁾

4.4.1 ダムの概要および実施目的

下久保ダムの概要を表-5 に示す。ダム直下流約 1.5km は、国の名勝及び天然記念物に指定されている「三波石峠」である。この区間は、ダム運用による無水区間の発生や土砂移動の遅延による河床低下が生じるなど景観が変化した。そのため、2001 年から維持流量放流を開始し、

土砂管理とダムに関する国際シンポジウム（2005.10 横浜）
2003年から土砂掃流試験を開始した。この目的は、河原の再生やクレンジング効果による三波石の景観復元である。なお、この取り組みは、地域住民や行政との意見交換や、有識者の指導・助言を得ながら実施している。

表-5 下久保ダム流域概要	
ダム名	下久保ダム
河川名	利根川水系 利根川
流域面積	40.3km ²
ダム貯留開始からの経過年数	36年
ダムの位置(利根川合流点までの距離)	約30km
ダムの蓄水面積	322.82km ³
ダム付近の河川状況	約1/130
河床勾配	約3.02m/s
ダム流入量(平水量)(2002年)	3.60m ³ /s
ダム放流水量(平水量)(2002年)	3.60m ³ /s



写真-8 下久保ダム

4.4.2 調査方法

河床材料を吟味ダムにて採取し、ダム直下流に運搬・投入し、ダム放流時に掃流させる。調査内容は定期的な景観調査(写真撮影)等である。調査範囲はダム下流約3.0km(登仙橋地点)までとした。

4.4.3 調査結果

クレンジング効果により三波石に輝きが戻るなど景観改善に対する一定の効果が確認された(写真-9)。また、一部に河原の再生も確認できた。

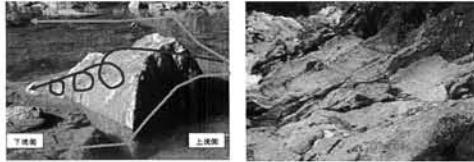


写真-9 クレンジング作用のイメージ及び凹部のクレンジング状況

4.5 管理ダムにおける取り組みの成果

以上の取り組みについて、評価できる点を整理すると以下のようになる。
①高山ダム・比奈知ダムでは、付着藻類の優占種の変化や活性化に着目し、フラッシュ放流のみで一定の効果を得た。また、一庫ダム・阿木川ダムでは、土砂掃流により付着藻類の剥離効果が確認された。
②浦山ダムでは、川に生息する魚の産卵場の維持に着目し、土砂掃流により産卵場への土砂供給が確認された。
③下久保ダムでは、地域特有の観光資源(名勝、天然記念物)に着目し、土砂掃流による景観の復元等の効果を得た。
④阿木川ダムでは、土砂掃流試験に先立ち、流速・土砂濃度と付着藻類の剥離率に関する基礎的実験を行っており、本施工時の評価に際して重要な資料を得ている。
⑤下久保ダム・一庫ダムでは、地域住民や学識者等との意見交換会を開催し、その中で議論しながら進めている。

土砂管理とダムに関する国際シンポジウム（2005.10 横浜）

(2) 目標に応じた土砂掃流方法の選定

ダム下流の限られた範囲の河川環境の改善であれば、ダム直下地点への土砂供給とダムのドローダウン操作等により十分実施可能である。

しかし、ダムの放流設備能力および貯水容量の制約等から、ダムにより生み出すことのできる掃流力には限界がある。

したがって、より大規模な土砂移動のためにには、河道および流況の特性に応じて、土砂供給地点および供給量を順次的に設定することが望ましい。

(3) きめ細かいモニタリング

ダム放流の現象に依存する。したがって、その時の河川の状況に即して、モニタリングを行なうが土砂の供給、掃流を実施し、計画立案、変更を繰り返していくこととなる。このような順次的な土砂供給のためには、常時よりダム下流の河川環境のきめ細かいモニタリングを継続し、データベース化することが有効である。

(4) 様々な方面からの協力・理解

実際に河川環境のモニタリングや土砂供給、放流操作を行うにあたっては、下流の河川を管轄する行政、河川取水を行っている利水者、河川を直接利用している漁業者や観光業者、地域住民等との連携、協力が重要である。

(5) 経済的で効果的な手法の開発

以上の取り組みによって、土砂掃流が河川環境に与える影響についての科学的知見を積み重ねていく必要がある。それらの成果により、更に経済的で効果的な手法の開発を目指すことが重要である。

○参考文献：

- 1) 財團法人 河川環境管理財團：流水・土砂の管理と河川環境の保全・復元に関する研究、2004年12月。
- 2) 金蔭：ダム貯水池の堆砂対策の現状、ダム年鑑、1997。
- 3) 芦田ら：ダム堆砂に関する研究、京大防災研年報 17号 B, 1974。
- 4) 渡部ほか：高山・比奈知ダムフラッシュ放流について(中間報告)、水資源機構関西ブロック技術研究発表会、2004。
- 5) 渡部ほか：高山・比奈知ダムフラッシュ放流の実施報告について、近畿地方整備局管内技術研究発表会、2005。
- 6) 水資源機構中部支社ほか：平成16年度中部地方ダム等フォローアップ委員会生物調査検討会、阿木川ダム下流河川環境復元に向けた取組、水の技術、No12, 2004。
- 7) 前田ほか：一庫ダム下流河川環境復元に向けた取組、水の技術、No12, 2004。
- 8) 国土交通省関東地方整備局ほか：2003年度関東地方ダム等管理フォローアップ委員会・ダム・河川分科会資料。
- 9) 桐野ほか：浦山ダム下流に投入した土砂がウグイの産卵にもたらす効果について—ダム下流河川における土砂投入の効果—、生態工学6(1), 2003。
- 10) 中嶋ほか：ダム下流河川の景観復元に向けて地域と連携した諸対策の報告及び技術評価手法の試み、水資源機構関東ブロック技術研究発表会、2004。
- 11) 雪本ほか：「川が動く！」？一出水が引き起こす河川状況の変化に対する一考察—。水資源機構技術研究発表会、2004。
- 12) 木戸ほか：高時川流砂系における丹生ダムの影響、河川技術論文集、第11巻、2005年6月。

土砂管理とダムに関する国際シンポジウム（2005.10 横浜）

5. 建設中のダムにおける流砂系保全に向けた検討事例^{11), 12)}

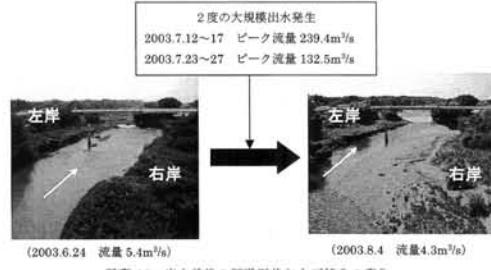
丹生ダムの概要を表-6に示す。丹生ダム(淀川水系)を建設中の高時川は、アユ等魚類の重要な産卵育成の場となっている。そこで、高時川の土砂動態を把握し、ダム建設後の流砂系保全対策の基礎資料を得るために、以下の調査、解析を行っている。

河川の地形(河道、流路、砂州、河床等)、植生の変化を視覚的に把握するとともに、ダム建設前の河川状況のデータベースを作成するため、主として平野部(河口～約14km)において、継続的に定点写真撮影を行っている。撮影位置はおおむね1~2kmごとに橋梁上から、撮影頻度はほぼ毎1回以上である。これにより、河川流況と河床の変化の関係を継続的に把握することができる(写真-10)。

また、高時川における流砂系一貫した土砂流出予測モデルを用いて、丹生ダムが高時川流砂系に与える影響と効果、具体的には河床変動、掃流土砂の量および質の変化を定量的に予測している。

表-6 丹生ダム予定地流域概要

ダム名	丹生ダム
河川名	淀川水系 淀川支川 高時川
流域面積	212.0km ²
ダムの位置(河口からの距離)	約30km
ダムの蓄水面積	93.1km ³
ダム付近の河川状況	約1/130
河床勾配	約3.02m/s
流量(平水量)(2003年)	8.56m ³ /s



6. まとめ；今後の方針

以上の事例から得られた見解をふまえ、今回対象としたような、特に土砂移動の激しくない河川のダムにおける今後の流砂系保全の取り組みに向けて、次の5点が重要と考えられる。

(1) 目標の設定

目標としては、河床低下の防止、流路の固定化防止、河床材料の粗粒化防止、付着藻類の剥離更新、景観保全・復元等が挙げられる。今回の事例から、付着藻類の剥離作用という点では、放流水量のみのコントロールでもある程度有効であったが、土砂供給も組み合わせることで、藻類剥離効果の向上、河道への細粒分の供給、小規模な砂州の回復にもつながる。

【特別企画】

ダムの堆砂対策に関する取り組みと今後の課題

国土交通省河川局河川環境課 谷田 広樹*

2003

877 座

図-1に地方別、ダム管理毎に各ダムの堆砂率を示す。堆砂率は中部地方で高く、中国地方や沖縄地方では低い。

堆砂の多い中部地方は、急峻で地質的にも中央構造線や丹波川静岡構造線などの大きな構造線を有し、土砂生産活動が活発な地域を流域に多く抱えている。

図-2に堆砂率の高いダム上位50を示す。50ダム中で最も堆砂率の高いダムを示す。これは、「堆砂」がダムの安定計算という応力的な設計の位置づけの時代(昭和32年以前)のダム100年間の堆砂量を算出する基準は昭和32年のダム(設計基準以下である)に、発電ダムが多く建設された結果と想定される(表-1)。なお、13位に位置する芦別ダム(国土交通省管理)は、桂沢ダム(国土交通省管理)へ導水を目的とする高さが22.8mのダムであり、また、16位に位置する品木ダム(国土交通省管理)は、農業河川を中和するため、河川に投下する中和剤から発生する砂和生成物を堆積させる目的で設置されている。どちらのダムも市や都用水の需水量を満たす「量」をダム機能として有しておらず、多目的ダムとは性格を異にするものであり、堆砂が問題となるダムではない。

図-3に国土交通省所管直轄ダムおよび水資源開発公団管理ダム(合計84ダム)の堆砂の進行状況を整理したものである。調査ダム全体では、堆砂の進度(%)は計画で見込んだものに対して約9割となっている。これらの進行状況を様向別に大別すると以下の4ケースに大別される。
※堆砂の進度 = 実績堆砂量 / 工程堆砂量 × 100%
・ケース1：初期から計画時に想定した平均的な堆砂の進度(以下、「計画堆砂進度」という)を上回るケース…ダム運用初期段階より、実際の堆砂進度が計画堆砂進度を上回り、その増加傾向に変化が認められないダム(図-4)。

2. 堆砂の進行状況

2.1 ダム堆砂の現状

877ダム(総貯水容量がおおむね100万m³以上)。そのうち、国土交通省直轄管理ダム73ダム、水資源開発公団管理ダム(特定施設)20ダム、国土交通省所管水資源開発公団管理ダム28ダム、利水専用ダム502ダム)について

平成12年度実績と算出した結果、総貯水容量約183

m³に対する堆砂量は約13.5億m³となっており、

877ダムの平均値として、総貯水容量に占める実績堆砂量の割合(堆砂率)は7.4%である。

3. 堆砂の原因

3.1 堆砂の原因

堆砂の原因は、ダムの建設による土砂供給の増加

によるものと、ダムの運営による土砂供給の増加によ

る。前者は、ダムの建設による土砂供給の増加によ

る。後者は、ダムの運営による土砂供給の増加によ

る。前者は、ダムの建設による土砂供給の増加によ

る。後者は、ダムの運営による土砂供給の増加によ</

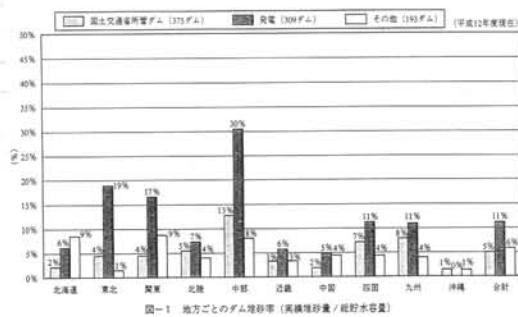
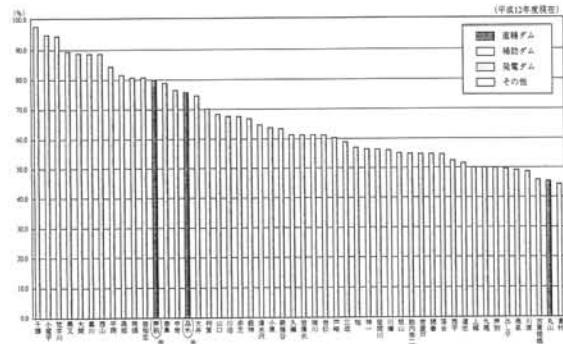


図-1 地方ごとのダム堆砂率（実積堆砂量 / 累計水容量）



水質別ダムは、底水の分離を目的としたダム。品木ダムは、香美川上流の水質改善（難性河川を中和）のために、中和剤を投入し、その中和剤を堆積させたためのダムで、いまでも堆積が機能して問題となるものではない。

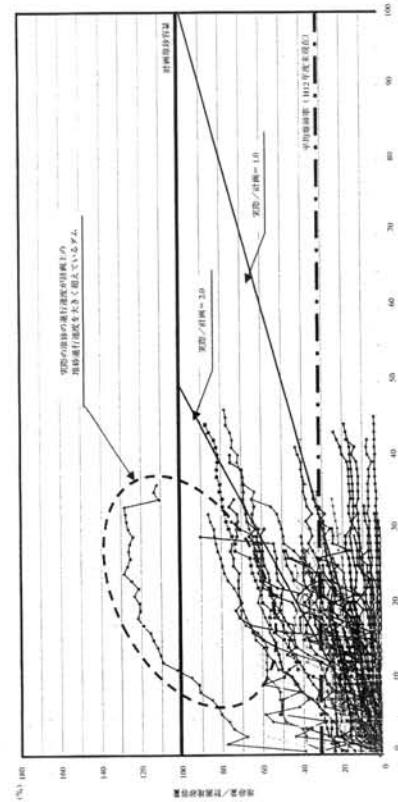
図-2 総貯水容量100万m³以上のダムに関する堆積率(堆積量/総貯水容量)トータル50

ダム技術 No.200 (2003. 5)

表-1 直轄等別トップ50

年号	当主姓氏	名	暦年	施工月	備考		
1	中	千	七	昭和 7.7	昭和 10~10月		
2	北	施	九里子	昭和 8.0	昭和 11年 8月		
3	東	北	紀子	昭和 8.4	昭和 5年 1月		
4	北	施	英	昭和 8.9	昭和 2年 3月		
5	中	大	間	昭和 8.8	昭和 13年 1月		
6	石	綾	川	昭和 8.7	昭和 11年 1月		
7	萬	東	西	山	昭和 8.6	昭和 12年 4月	
8	中	平	洋	昭和 8.5	昭和 27年 1月		
9	萬	黑	良	昭和 8.1	大正 1年 1月		
10	萬	東	信	昭和 8.0	昭和 42年 5月		
11	北	海	道	喜知志	昭和 8.7	昭和 33年 7月	
12	北	海	道	舟	昭和 7.9	昭和 32年 7月	
13	中	松	幸	泰	昭和 7.9	昭和 11年 1月	
14	萬	中	前	裕	昭和 7.5	大正 13年 1月	
15	萬	東	品	雄	昭和 7.5	昭和 40年 4月	
16	中	大	井	七	大正 13年 2月		
17	北	施	利	豊	昭和 18年 1月		
18	中	田	山	日	昭和 6.8	昭和 22年 12月	
19	北	海	道	川	昭和 6.7	昭和 15年 11月	
20	北	施	秀	至	昭和 6.7	昭和 29年 5月	
21	北	施	義	神	昭和 6.6	昭和 16年 1月	
22	北	海	道	清	昭和 6.4	昭和 11年 2月	
23	北	施	小	原	昭和 6.3	昭和 17年 1月	
24	北	施	新	吉	昭和 5.4	昭和 25年 1月	
25	中	松	久	蔵	昭和 5.3	昭和 28年 9月	
26	北	海	道	津	昭和 5.1	昭和 34年 7月	
27	中	松	義	川	昭和 5.1	昭和 19年 7月	
28	北	海	道	松	昭和 4.3	昭和 17年 1月	
29	北	施	升	助	昭和 4.3	昭和 18年 6月	
30	中	國	三	成	昭和 3.8	昭和 28年 10月	
31	北	施	勝	敏	昭和 3.8	昭和 10年 12月	
32	北	施	勝	一	昭和 3.6	昭和 29年 1月	
33	中	田	正	昭	昭和 3.6	昭和 35年 11月	
34	北	海	道	藤	昭和 3.0	昭和 38年 3月	
35	北	施	鶴	山	昭和 3.0	昭和 5年 10月	
36	北	施	鶴	内藤	昭和 3.0	昭和 34年 10月	
37	北	施	鶴	義	昭和 3.0	昭和 17年 3月	
38	中	田	昌	義	昭和 3.0	昭和 35年 11月	
39	中	田	昌	登	昭和 3.0	昭和 12年 12月	
40	中	田	昌	平	昭和 3.0	昭和 35年 12月	
41	萬	東	重	志	昭和 3.0	昭和 36年 3月	
42	東	北	上	重	昭和 3.0	昭和 27年 1月	
43	北	施	久	助	昭和 3.0	昭和 12年 9月	
44	北	海	道	昇	昭和 3.0	昭和 26年 1月	
45	北	施	喜	平	昭和 3.0	昭和 20年 3月	
46	中	農	英	平	昭和 3.0	昭和 21年 1月	
47	北	施	喜	平	昭和 3.0	昭和 15年 4月	
48	北	施	喜	賀	昭和 3.0	昭和 34年 3月	
49	中	田	久	川	昭和 3.0	昭和 23年 1月	
50	北	海	道	喜	村	昭和 3.0	昭和 5年 9月

機器による 云有能性



ゲーム技術 No. 200 (2003. 5)

図-4 堆積運行状況圖（ケース1）

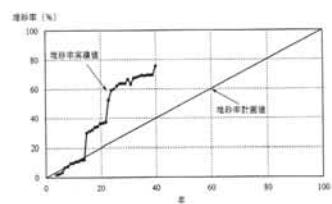
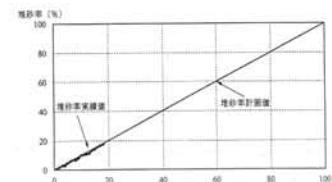


図-5 堆積進行状況図(ケース2)



第二章

より、実験の堆砂速度が計画堆砂速度を下回っているダム(図-7)。

84ダムの堆砂進行状況を現況階で評価すると、約1割弱のダムがケース1、ケース2に分類される。なお、個別のダムごとに堆砂の進度をみると、堆砂が大きな

出水時に一気に進むことがあり得ることを踏まえれば、
ある種の機械の精度が時間的精度を超過したことか

ある時点、砂州の進退速度が海岸侵食速度を超えたところに堆積する傾向となるものではない。

2.2 水系一貫した土砂管理 上游落水→下流

流域、土砂の問題はやはり、山麓部、麓原部、平原部、河口、海辺部等のそれぞれの領域との対応で解決が図られ、成果が得られてきているが、平成11年3月に(2)河川審議会から「流域の源頭から海側の流域まで一貫した土砂移動論」を「流域式」という観念でとらえ、一貫した土砂移動論の実態把握とともに適切な土砂流出抑制および下流への土砂供給などの取り組みと一緒に実行すべき旨の答申がなされた。現在、土砂の移動による災害の防止、生態系、景観等の環境保全、河川河床の正常化の利害利用を図るため、この答申を踏まえ土砂移動の実態把握と流域的視点での土砂管理が求められる。

これらの施設を推進していくため、グムにおける新たな実態把握に努めている。

な土砂管理システムの構築にむけて、次の項目について

今後さらに検討していく必要がある。

③ 既設ダムの堆積土砂を排出するためのシステムの 構築

整備

③ 技賀利水ダムにおいて堆積土砂を排出するための
施策

④ ダム下流の土砂移動を考慮したダム放流の検討
また、技術開発の推進として、適正な量と質の土砂を
ダムから排出する新たな技術の開発が必要である。検討

アムから挙出する新たな技術の開発が必要である。既に土砂管理小委員会の報告の概要を図-8に示す。

3.1 ダムの潜伏封築方法

3.1 ダムの堆砂対策方法
ダムの堆砂問題は、地域特性、ダムの運用、貯水池規

3. 増砂対策の現状

3.1 ダムの帶除対策方法

3.1 フラムの堆砂対策方法

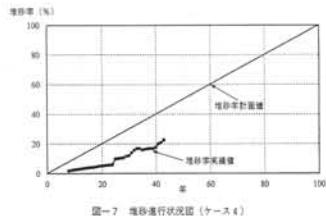


図-7 堆積進行状況図(ケース4)



圖-8 地合土野管理小委員會報告

へ適用することが必ずしも適切なものとはならない。これは、水質地盤の埋漬層が、地盤の地形、地質的要因、気象、水文要素や野水の回遊などの幾つかの水の特性に対する影響を「受け、受け取る」現象であるとともに、野水開港場の状況等によって選択できる基準がまた異なるためである。したがって、堆積対策は、個別の野水の条件に応じた個別の対策が必要である。

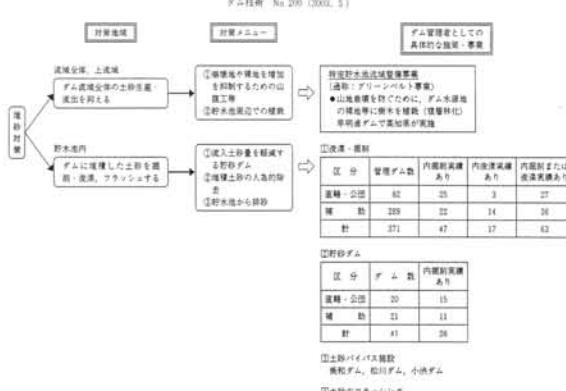
第七封函 No. 209 (2002-5)



进阶指南



图-10 原木检测3



国土緑のアドバイス
宇宙月グム（網町）

に示した技術については、改良途上のものもあり、今後、精度向上が図られていくこととなる。また、これらの技術に関して、流域系における総合的な土砂管理の視点から眺めた場合、対象土砂すべてを取り扱う技術のものは少なく、各技術を組み合わせることが必要であるこ

とが判る。

3.2 堆砂対策の実施例

3.2.2. 上流域における対策
流域全体の土砂量生産と流出を抑止、貯水池への流入土砂を抑制する対策として、原堤地や裸地を減少させるための各種の山形護岸、渠溝浸食防止、砂防ゲルなどの総合的な対策等があげられる。これらの対策は、幾種類の発生上根本的な解決策である流出土砂量の軽減と安定化によって最も有効な対策であるが、発生土砂の完全な拘束は困難であり、かくかばり性に乏しい。なお、琵琶湖行政評議会より、ダムの貯水池（ダム湖）への土砂や汚泥水の流入を抑制するためダム周辺の湖畔林の整備が重要である旨の指摘があり、国土交通省に対して「ダム湖周辺の森林の健全性の重要性についての検討点を踏まえ、係合の必要性が認められる場合は、漁業者区域の指

に、保安林の指定の要請が必要と判断される場合は、保安林の指定権者（農林水産大臣または都道府県知事）に対し、指定の要請を行う。旨の指摘が平成13年になされた。現在、国土交通省直轄ダムについて森林保全の必要性に係る取組を実施し、とりまとめを行っていま

国土交通省として行っている特定貯水池流域整備事業

(通称: グリーンベルト事業) の概要について図-11に

3.2.2 貯水池における浚渫、掘削
貯水池内の堆積土砂を掘削あるいは浚渫により人工的に排出するもので、多くの貯水池で実施され、掘削、浚渫されたものの一部は建設資材として利用されている。
この方法では、浚渫土砂の処理、漏水処理対策などが構造工事となり、それぞの貯水池においても堆積された土砂

の用途等を勘案して

3.2.3 貯砂ダム

(1) 鳴 東 勘
貯水池末端部に土砂を堆積させるための小規模なダム(貯砂ダム)を設ける方法で、貯砂ダムの背水により土砂を沈降堆積させ、水位低下後に土砂の搬出を行なうものである。堆積した土砂は貯留容量が増加する。

45

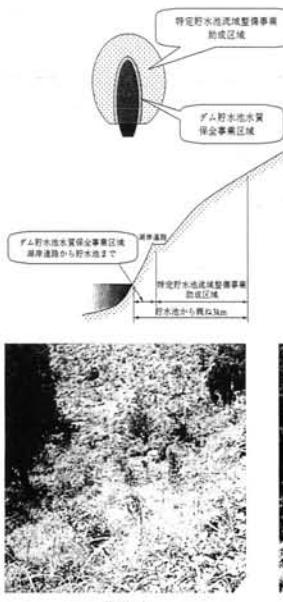


図-11 特定野水流域整備事業

主に灌漑対策を目的として、ダム野水流域内のおおむね2km以内(軽井沢町)の春耕地帯において、耕野作土壤を固めながら種苗等を供給。

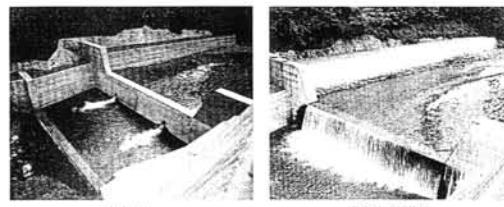


図-12



施工前

施工後

図-13 特定野水流域整備事業

することとなるが、掘削土砂の一部は骨材として有効利用したり、ダム下流河川の河床低下の抑制や粗粒化防止を目的として下流河川に土砂を運送している。

野砂ダムの計画堆砂量はダムへの年平均流入土砂量の1~3年分程度の事例が多く、実際的には野砂ダムからの土砂搬出が必要である。掘削土砂を建設骨材として活用したり、ダム下流への河川運送を図るなどして出水時期には野砂ダムの容量を確保しておくなど、野砂ダムを恒久的な堆砂対象として位置づけていく姿勢が大切である。

ダム技術 No.200 (2003. 5)

i) 下流河川運送実験の結果

ダム下流に堆積した1,000 m³はおおむね下流へ、トレーラーとして用いた方解石は約1.2 km下流まで運下していた。

試験実験中の河川流量は、降雨時の河川流量の半分以下で、人工洪水が生物生息に与える影響は少ないと考えられる。試験前の状況を図-14に示す。

ii) 今後の課題

土砂の復讐場所、復讐量、頻度および復讐土砂の粒径やフラッシュ放流との組み合わせについて、より効果的な方法を検討する必要がある。

また、アーマコート化の範囲に伴う底生動物等の生息環境の向上確認を目的としたモニタリング手法の確立が必要である。

3.2.4 フラッキング排砂（宇奈月ダム、出し平ダム）
黒部川は、日本で有数の土砂生産量を有している河川である。また、年平均降水量が3,800 mmと多く、野砂量の回復が比較的容易である。このため野砂ゲート方式によるダム堆積土砂の排砂（以下「フラッキング排砂」と呼ぶ）が出し平ダム（関西電力管理）と宇奈月ダム（国土交通省管理）で計画された。また、この2ダムが同一河川に位置することから、フラッキング排砂時においては、2ダムが連携して行う計画とした。

出し平ダムでは、平成3年12月から、平成11年末まで、計8回、458万m³の排砂を実施しており、宇奈月ダムが完成したことにより、平成13年6月に初めて連携したフラッキング排砂が行われた。

勢が大切である。野砂ダムの事例を図-12に示す。

(2) 野砂ダムに堆積した土砂のダム下流河川運送（三春ダム）

三春ダムでは、ダム下流河川の河床低下等を防ぐため、野水池東端の野砂ダムに堆積した土砂の一部をダム下流の河川へ復讐し、フラッシュ放流により土砂を下流へ土砂を運送する実験を行っている。

実験の全体像を図-13に示す。

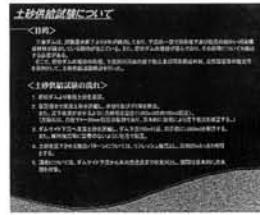


図-13-1

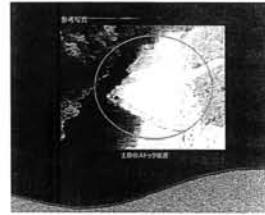


図-13-3

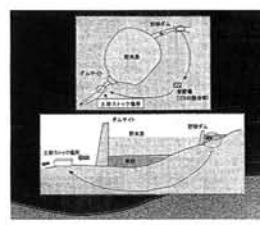


図-13-2

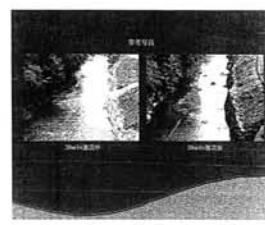


図-13-4

ダム技術 No.200 (2003. 5)

排砂実施期間は、6月~8月でダム流入量がそれぞれ定められた一定規模（出し平ダム300 m³/s、宇奈月ダム400 m³/s）以上の出水時にフラッシュ排砂を実施する。

連携して排砂する際には、漁業、農業関係者をはじめとする地元関係団体から広く意見を聽取り、学識研究者から構成される「黒部川ダム排砂評価委員会」の技術審査を経て計画が策定され、地元関係機関等で構成される「黒部川土砂管理協議会」で承認されるという手順がとられている。

土砂の移動が生物の生育環境に与える影響を効果については、これまで種々の調査が行われており、「黒部川ダム排砂評価委員会」での審議の結果、近年のダムの排砂による影響は特に認められていない。以後も、排砂時における影響を定期的に監視し、生物の生育環境に与える影響について引き続き検討を行っていくこととされている（図-15）。

3.2.5 排砂バイパス（ダム）

(1) 概要

旭ダムは、昭和53年に完成した関西電力奥吉野発電所の下部調整池である。上流域における崩壊地の増大などにより、出水時に野水池へ流入する土砂が増加し、漏水の長期化現象が顕著となった。こうした漏水長期化問題の解消や堆砂の進行を抑制するため、野水池を迂回する排砂バイパスが平成10年に設置された。

(2) 排砂バイパスの効果

排砂バイパスは、出水時に堆砂を含むダムへの流

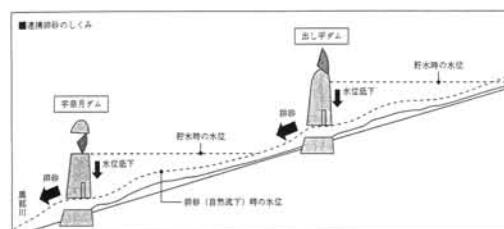


図-15 出し平ダム、宇奈月ダムの連携排砂

入土砂を最大140 m³/sダム下流へバイパスさせる。

図-16に排砂バイパスの概要とバイパス運用前とバイパス運用後の年度別堆積量を比較したものを示す。

排砂バイパス運用前には、出水のピークから1週間以上経過した後でも下流河川では高さが50 cm以上であったが、排砂バイパス運用後は、ピーク時から3日目には高さが5 cm以下まで低減しており、漏水長期化問題に大きな効果があることが確認されている。

(4) 今後の課題

今後の課題として以下の事項が挙げられる。

i) 運用中のダムに排砂バイパスを設置した場合には、ダム下流河川が自然の出水状況に近づいていくことはいえ、土砂供給が途絶えていた河川への土砂供給再開を行うため、排砂バイパス設置に伴うダム下流河川の生態系の変化を継続的にモニタリ

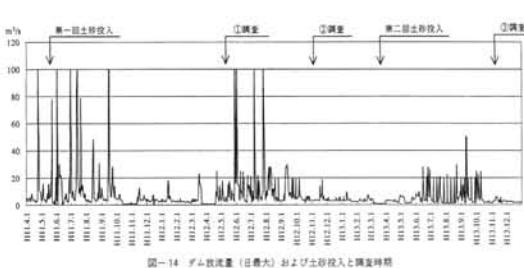
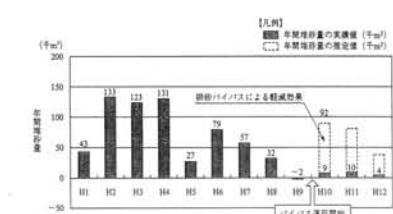


図-14 ダム放流水量（日最大）および土砂投入と調査時期

ダム技術 No.200 (2003. 5)



(注) 年平均堆積量の実測値は、「関西電力奥吉野ダム野砂堆積抑制対策実験結果（平成元年度~平成12年度）」による。
*年平均堆積量の推定値は、排砂量をシミュレーション（芦田・直上式）による。

図-17 旭ダムの排砂バイパスによる軽減効果

ダム技術 No.200 (2003. 5)

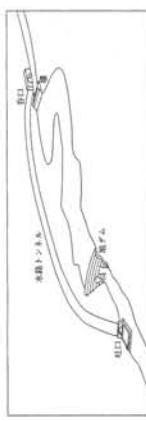
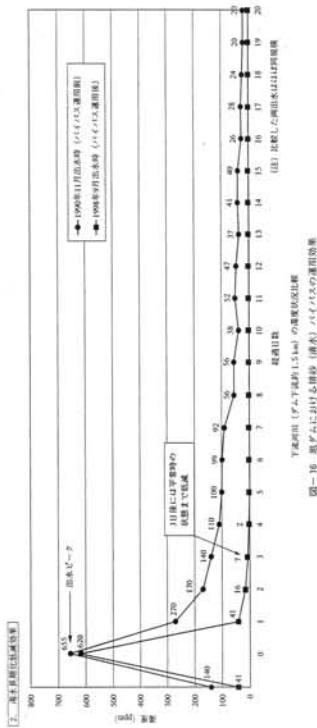


図-15 治水・利水・発電等の目的を持つ貯水池
O.H. 高さ：河川名：貯水池名：施設名
O.H.A. : 3.4m, 高さ: 2,200m
O.H.B. : 3.4m, 高さ: 2,200m
O.H.C. : 3.4m, 高さ: 75.7m
O.H.D. : 3.4m, 高さ: 75.7m
O.H.E. : 3.4m, 高さ: 75.7m
O.H.F. : 3.4m, 高さ: 75.7m
O.H.G. : 3.4m, 高さ: 75.7m
O.H.H. : 3.4m, 高さ: 75.7m



ダム技術 No.200 (2003. 5)

ダム技術 No.200 (2003. 5)

ダムの堆砂の現状と対策 (摘要)

平成11年11月

1999年以前
水資源開発公団

シングしていく必要がある。

ii) 排砂バイパスの対象土砂として堆砂跡の取扱いの検討や、対象とする場合の程度の推定を行う必要がある。また、排砂トンネルの蓄貯対策と管理後の点検、補修を検討する必要がある。

4. おわりに

多目的ダムの計画では、ダム貯水池内に流入する土砂量（原則として100年分）に相当する容量を堆砂容量として確保することとしている。このため、堆砂の進行が著しいダムなどを除くと、当面、堆砂対策等の土砂管理の必要性は低いと考えがちである。しかし、国内の既往された過例においてダムの計画、管理されていること、すなわちダムが有機の貢献なストックであることを考え

ると、貯水池を将来にわたって有効かつ持続的に使用していくことは、さわめて重要である。一方、流砂系における総合的な土砂管理の視点に立ってダムを眺めた場合、ダムは土砂管理の要としてその役割がますます重要な役割を果すとともに、土砂を流すダムの実現が必要となってくる。このように、堆砂容量を確保している100年間は、ダム運用上の1通過点としてとらえ、堆砂対策を推進していく必要がある。

今後、ダムの堆砂対策に関する取り組みを積極的に行っていくためには、ダムへ流入する土砂の量と質を十分に把握し、ダムから下流河道への適正な土砂供給量を設定する手法、土砂供給の新技術や堆積土砂のリサイクル等に関する調査、研究を実施し、ダムにおける新たな土砂管理システムを確立していく必要がある。

はじめに

ダムは、治水、利水、発電等の用途を持つて建設され、社会基盤を構成する重要な施設であるが、一方で、貯水池に絶えず堆積する土砂によって、その機能が低下しているものも相当数みられ、良好な状態でダムを機能させ後世に残すには、このダムの堆砂対策は現在解決すべき緊要な課題となっている。

現在、ダムを計画する際には、将来貯水池に堆積する土砂を予測して、ダムの機能に支障となるよう貯水池の容量の中に見込んでおく手法を探っているが、この予測精度は必ずしも十分ではなく、水資源開発公団が現在管理しているダムにおいても本報告書に述べるように、計画を上回る速度で堆砂が進んでいるものもあり、将来に備えて有効な対策を行っておく必要がある。

この様な背景から、技術管理委員会の下部組織として、ダム堆砂対策検討分科会を組織して、公団管理ダムにおける堆砂の状況を把握することともに、現在管理しているダムや建設するダムの堆砂・排砂対策の検討を進めてきた。現在のところ、公団が管理しているダムについて「牧尾ダムを除いて利水容量や治水容量に土砂が貯まっているような致命的な状態にあるものではなく、浚渫等の高コストの対策が必要な状態ではない。いくつかのダムで計画を上回る速度で堆砂が進行しているが、順次貯砂ダムの建設とそこからの土砂の排出でダムの機能に支障となるよう対策をしているところである。また、今後建設するダムにどのような堆砂対策が有効であるかを検討するため、全国的に展開されている取り組み状況についてもレビューしたが、現在のところ、低コストで効率よく目的を達成できる抜本的な対策はなく、継続して研究すべき課題である。

分科会では、堆砂は一方で建設資材としての性質を持つものであるから、資源としての価値を高め、これを利用することによって、低コストで堆砂対策が成立しないかという点について時間を削いて検討した。

それには、①貯水池末端に貯砂ダムを建設すること、②貯砂ダムに堆積する土砂の資源として利用できる割合を高めるように工夫すること、③堆砂の採取コストを低下させるよう工夫すること等が必要である。

貯砂ダムは従前、本報告書に述べるように、ダム建設事業時に設置したものについては特別な条件下にある場合に限って設置してきたが、今回ダム建設事業時にすべてのダムでこれを建設したときの経済性（コスト・ベネフィット分析）について、検討を初めて試みた。（第4章参照）その結果、貯砂ダムの建設にイニシャルコストはかかるものの、堆砂の進行を遅らせるこことによって、ダムの耐用年数が延びるため、経済的にはペイできるという興味深い結論を得た。

分科会で調査・検討した結果を本報告書に取りまとめた。今後の業務執行に参考となれば幸いである。なお、今後検討すべき課題は本報告書に述べたとおりであるが、いずれも長期間の検討を要するため、今後は試験研究所等で取り組むのが適当と考える。

平成11年7月
常務参与 水野光章

第1章 公團管理ダムの堆砂の現状

(1) 公團管理ダムの堆砂実績とその評価

1) 公団管理ダムの堆砂実績

平成10年4月現在、公団で管理する主なダムの堆砂状況は、表1-1、表1-2及び図1-1、図1-2のとおりであり、下久保ダムをはじめ多くのダムで計画以上の速度で堆砂が進行している。これらのダムの中には、「野水湖(保全事業)」により「暫設ダム」を建設し土砂搬出を行っているダムもあり、また最近は、ダム建設時に貯砂ダムを建設しているダムも多くみられる。

表1-1 公団管理ダムの堆砂状況（その1）

ダム	堆砂現況	野村ダム等
丸太沢ダム	計画の半程度の堆砂量。	
渡良敷ダム	堆砂初期、流入土砂量は少ない。	
下久保ダム	管理開始から 20 年で堆砂率が 61.2%、堆砂速度は計画の 2 倍以上になっていいる。	H7.7～12 年度で、野村ダムを建設中。
草木ダム	管理初期に渡入土砂量が多かったが、近年は落ち込んでいる。	H3.3 に野村ダム設置。
佐那ダム	管理初期、土砂量が多かったが、近年は落ち込んでいる。	H2.3 及び H3.3 に野村ダム設置。
阿木川ダム	管理初期、流入土砂量は多いが、近年は落ち込んでいる。	建設中に野村ダム設置。
疋峰川ダム	管理初期、流入土砂量は極めて少ない。	建設中に野村ダム設置。
高山ダム	計画より堆砂量がや多い、堆砂量の増減が目立つ。	
遠舟ダム	計画と同程度の堆砂量。堆砂量の増減が目立つ。	
宮生ダム	計画より堆砂量がや多い、堆砂量の増減が目立つ。	
市貝ダム	管理初期、近年は落ち込んでいる。	
一鹿ダム	平成 8 年から堆砂量が増減、原因は不明。	建設中に野村ダム設置。
日吉ダム	管理開始直後、データなし。	
池田ダム	計画堆砂量 84 万 m ³ に対して、23 年経過時点で 215 万 m ³ と約 260 % の堆砂率となっているが、容積配分で 825 万 m ³ の充水量が確保されており、また、近年堆砂率が漸減していることから、貯水池運用上問題ない。	
早明浦ダム	管理初期に流量大、近年は流量と同程度の堆砂量。	
新宮ダム	管理開始から 23 年で堆砂率が 57.2%、堆砂速度は計画の 2 倍以上になっていいる。	
寺内ダム	計画と同程度の堆砂量。堆砂量の増減が目立つ。	
宇連ダム	計画の 3.3 倍以下の堆砂量。	
江川ダム	計画と同程度の堆砂量。堆砂量の増減が目立つ。	

(※管理開始 10 年未満を管理初期とした)

表1-2 公団管理ダムの堆砂状況（その2）

*荒田ダムの計画堆砂量は堆砂支配流量(工,000~5,000m³/s)時の堆砂形状から包絡線で最終堆砂形状を求め、これと計画時点の河床形状の差より算出している。

2) 公団管理ダムの堆砂状況の評価

一般にダムの管理初期は、付け替え道路のズリやその他の工事に伴う流出土砂の助長も含め堆砂速度の大きい時期とされており、公團ダムにおいても、管理初期に堆砂速度が軒並み大きくなっているダムが多い。例えば、岩星ダムでは管理開始（昭和 52 年）の時点での約 165 万 m³、昭和 58 年度までに約 450 万 m³ が堆積し、計画の約 4.5 倍の速さで堆砂が進行したが、その後の堆砂量は計画の約 1/3 の 5 万 m³/年程度に落ち着いている。これは、大出水が少なかったことや昭和 61 年以降、堆土砂の一部を貯水池外に搬出したことの、貯水池周辺からの土砂流入量が落ち着いたことにによるものと思われる。

また、流入土砂はダムに捕捉されるため、毎年堆砂量が増加していくと考えられるが、堆砂測量の結果では経年に大きな増減を示すダムもみられ、これについては堆砂測量の手法（特に深波調査）に起因する問題であると考えられる。これについては(2)で考察を行った。

(2) 推定測量の精度に関する考察と規則

(2) 地盤砂量の精度に関する考察と提案
ダム貯水池における堆砂測量は、建設省河川局開発課が制定した「ダムの堆砂状況調査要領(案)」に基づき毎年実施している。一般に、ダム貯水池に流入する土砂の多くはダム湖内に堆積されるため、堆砂量は毎年単調に増加していくと考えられるが、堆砂測量の結果をみると、高砂山ダムのように大きな増減を示しているものもあり、その原因として、深浅測量における種々の誤差が関与していると考えられる。現行の堆砂測量の詳細を示す次のとおりである。

1) 堆砂測量の方法

現行の堆砂測量の方法は、図1-3に示すように、ダムの堆砂状況調査要領(案)に基づき、貯水池内においては、測線間隔400m毎に20mピッチで、貯水池上流の堆砂影響範囲においては、測線間隔200m毎に5mピッチで河川横断測量を行っている。水中部では音響測定探査により、床面部では通常の直接測量により測量を行っている。

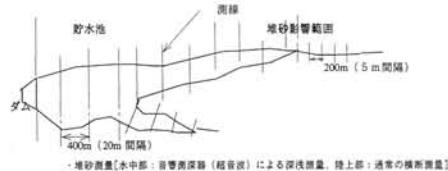


図1-3 現行の堆砂測量の方法

陸上部の直接測量の測定誤差は無視できるほど小さいと思われるが、音響測深器による水中部の測量では、以下に列挙する種々の誤差が含まれていると考えられる。

- の測量では、以下に列挙する種々の誤差が含まれる。

 - ①観測誤差
 - ②音響測深器記録紙の読み取り誤差
 - ③現場測定誤差
 - ④測量中の水位変化による誤差
 - ⑤水温変化による誤差
 - ⑥その他

各誤差の状況を示すと、表1-3のようになる。

各誤差の状況を示すと、表1-3のようになる

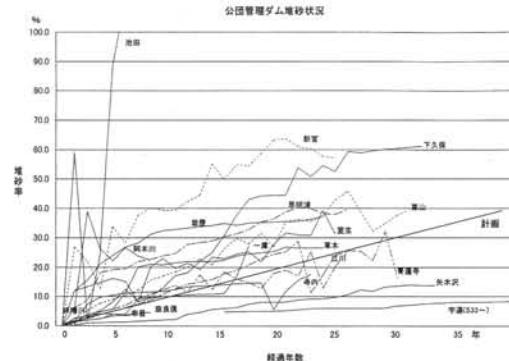


図1-1 公團管理ダムの堆砂状況（池田ダムを除く）

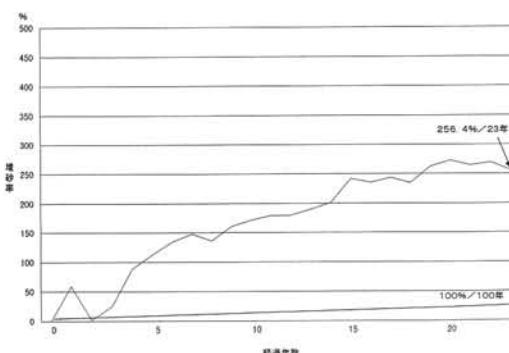


図1-2 沖田ダムの堆砂状況

(3) 公園における堆砂・堆積対策に関する取り組み

3) 現在までの公園における取り組み

1) 現在までの公園における取り組み
公園がこれまで山地部で建設し、管理している18ダム（房総導水路、三重用水、福岡導水の各事業で平地部に建設したダムを除く）のうち、貯水池上流端に堆積した土砂を貯水池外へ搬出した実績のあるダムは5箇所あり、これらのダムの土砂搬出量の年別のは実績は表2-3とのおりである。また、この5ダムによる堆积量砂礫搬出の実績、搬出方法等を比較して、表2-4に示す。これらの5ダムのうち、下久保ダムを除く4ダムには砂貯ダムが設置されており、下久保ダムにおいても現在、貯砂ダムの設置を計画している。この下久保ダムの計画については第3章

(3) での概要を記述する。

ここで、上の2つの表から、公團における堆積土砂の搬出に関する現状を概観すると、ダム湖の上流端付近に河床に降りる進入路が存在し、堆積土砂がコンクリート用骨材に替えた特性を有している。かつ、ダムの近傍にコンクリート用骨材の需要が存在する場合には、運搬距離が20~40km程度までであれば民間等が主体となって、公團からの資金的な援助なしに堆積土砂が搬出され、建設資材としての利用に供される状況が出現するものと考えられる。また、量的には、コンクリート用骨材の需要や仮設工事の空き容量との関係も考慮する必要があるが、年間で、 2 km^3 ~ 2.5 km^3 程度の土砂が搬出されている。

一方、公団が自ら搬出している布目ダムの場合には、堆積土砂の特性からコンクリート用骨材としての使用が不可能であり、予め確保されていた5万m³程度の容量を有する土捨場に、年間数回搬出される。

千m³のベースで搬出しており。すでに、土捨場の7割程度の容量を満たしていることから、別途、一般土木工事で発生する建設発生土と同様に建設資材としての活用方法を見出す必要がある。

ダム貯水池に堆積する土砂の利用に関する検討として、現在、試験研究室及び徳山ダム建設所において、揖斐川の徳山ダム建設地点の下流約10 kmに位置する横山ダムの貯水池に堆積した土砂を盛立材料あるいはコンクリート用骨材として使用できいかという観点から、堆積土砂の堆積位置と堆積材料の粒度分布、固め特性、凍結融解特性等の物理的特性とその関係を調査している。横山ダムを管理している建設省の平成3年度の調査によると、最低水位であるEL 18.0 m以上に堆積している土砂でフィルダムの盛立材料として利用可能な数量は43 0万m³程度あると見込まれていることから、この大量の堆積土砂の使用は徳山ダム建設事業費の削減に大きく寄与するものと考えられる。現在、公団が実施している調査については、次の（2）の2)で詳細に記述する。

表2-3 公団の5ダムの堆積土砂搬出実績(1999年6月)

(単位:m³)

	下久保ダム	草木ダム	岩屋ダム	阿木川ダム	布目ダム
(搬出主体)	(財團)	(民間)	(民間)	(公團)	(公團)
昭和60年度	11,967				
昭和61年度	11,574		850		
昭和62年度			880		
昭和63年度		89,000			
平成元年度					
平成2年度					
平成3年度		4,000	3,199		
平成4年度	9,321	2,000	1,937	14,690	5,780
平成5年度			2,067	13,000	7,470
平成6年度	6,821		2,650	8,240	4,400
平成7年度	21,236				4,820
平成8年度	30,520		1,972	8,750	4,000
平成9年度	30,930	5,700		6,000	3,000
合計	122,269	100,700	13,555	22,990	32,510
				55,500	34,650

表2-4 公団の5ダムの堆積土砂搬出状況の比較

	下久保ダム	草木ダム	岩屋ダム	阿木川ダム	布目ダム	1992.
ダム完成年度	昭和52年度	昭和52年度	昭和53年度	平成3年度	平成4年度	
採取開始年度	昭和60年度	昭和63年度	昭和61年度	平成4年度	平成4年度	
土砂搬出主体	(財)神流湖整備協会	東毛砂利販賣組合	般華砂利販賣組合	般華砂利販賣組合	般華砂利販賣組合	公團
使用機械	11t ³ ショベル、0.6m ³ ショベル	11t ³ ショベル、0.6m ³ ショベル	11t ³ ショベル、0.6m ³ ショベル	11t ³ ショベル、0.6m ³ ショベル、0.6m ³ ショベル、200PSA ³ 船	11t ³ ショベル、0.6m ³ ショベル	
搬出土砂の用途	コンクリート骨材	コンクリート骨材	コンクリート骨材	コンクリート骨材及び捨土	捨土	部分分離(回転)
進入路の有無	有	有	有	有	有	
仮置場の有無	無	有	無	無	有	
運搬距離(km)	6~19	15	8~17	20	5.5	

公団？ 好土場

↓骨材、砂材？

↑骨材搬出設置：不會超出淹水区

2) 貯砂ダムの設計

(1) 貯砂ダムの設置位置

貯砂ダムの設置位置はサーチャージ水位と制限水位の間に貯砂ダム天端が位置し、制限水位までの間に適当な堆砂容量を有するように決定する。

これは、サーチャージ水位より上位標高に天端を設けると上流域の貯留範囲が貯砂ダムにより広がること。また、制限水位よりも低位標高に天端を設けると土砂搬出に貯水の影響を受けるためである。

(2) 貯砂ダムの構造設計

貯砂ダムの構造設計は、河川砂防技術基準(案)の砂防ダムによっている。この中で、安定計算に用いる荷重及び数値、ダム形式の選定、水通しの設計、堤体の設計、基礎の設計、袖の設計、前庭保護工の設計、付属物の設計等を設けて構造設計の詳細が規定されている。

これらの規定について、通常の貯水ダムの設計との相違という観点から整理してみると次のようになる。

- ① 貯砂(砂防)ダムについては、貯水ダムと異なり、堤高1.5m未満のダムについても規定されることとなっているが、荷重の組み合わせは明記されていない。(堤高1.5m以上の貯砂ダムに対する荷重の組み合わせが規定されているものと考えられる。)
- ② 貯砂(砂防)ダムを建設する地点の基礎地盤については、岩盤基礎を原則としているが、砂礫基礎あるいは特殊な基礎処理を施すことにより土砂基礎も対象としている。
- ③ ダム形式としてコンクリートダムに加えて、鋼製ダム、棒ダム等も対象としている。
- ④ 貯砂ダムの水通しは貯水ダムの洪水吐きとは異なり、その過水断面を決めるための対象流量に関する詳細な規定が設けられていない。
- ⑤ 堤体の天端幅については、流出土砂等に対する耐衝撃性や水通し部での通過砂礫に対する耐耗性から定められる。
- ⑥ ②で述べたように、貯砂ダムの基礎地盤は岩盤基礎を原則としているが、できる限り堤高を1.5m未満とすることにして計画上やむえない場合には、砂礫基礎を許容している。ここで、貯砂ダムの安定条件として、コンクリート重力式の貯砂ダムでは基礎地盤が岩盤基礎の場合には貯水ダムと全く同じ判定式を用いて滑動に対する安全率も4を確保することとしている。一方、砂礫基礎においては、まず、滑動に対する安定性の判定式中の c_s を無視し、安全率は堤高1.5m未満に対して1.2、堤高1.5m以上に対して1.5としている。また、堤体底面の最大圧縮応力度が基礎地盤の許容支持応力度を超えないこと、クイックサンド及びバイピングに対する安全性を有することも求められる。
- ⑦ コンクリート重力式貯砂ダムの断面形状は、構造上の安全性、施工性等を考慮して決定される。特に、越流部の下流面勾配は底面砂礫の衝撃及び摩耗を考慮して1:0.2を標準とすることとされているが、流出土砂の粒径が小さく、かつ、その量が少ない場合には必要に応じてこれより緩くできるものとされている。また、非越流部の断面は越流部断面と同一とすることが標準とされているものの、地震時、非満砂状態で下流側からの地震時慣性力に対する安定性を検討した上で、非越流部の断面を越流部の断面と一致させないことも許容されている。公団における貯砂ダム等の設置目的、諸元等を表3-1に示す。

第3章 貯砂ダム(副ダム)の計画及び設計

(1) 貯砂ダムの計画(設置目的)

公団の多目的ダムの貯水池内に設けられる貯砂ダム等は完成9ダム(内訳:岩屋ダム2ダム、布目ダム1ダム、阿木川ダム3ダム、草木ダム1ダム、浦山ダム1ダム、味噌川ダム1ダム)、計画中2ダム(内訳:下久保ダム1ダム、辻澤ダム1ダム)がある。

これらのダムにおける貯砂ダムの設置目的を整理すると次のようになる。

① 本ダム貯水池の容量保全(8ダム/11ダム)

② 貯水池調節水保全(4ダム/11ダム)

③ ダム湖活動(2ダム/11ダム)

このうち、布目ダムの副ダムは上記3つを目的として設置されている。

次にこれら3つの設置目的について記述する。

(2) 本ダム貯水池の容量保全

ダム事業の貯水池の全容量は一般に必要な利水容量、洪水調節容量に堆砂容量を加えて決定され、これによって必要な買取高線が確定し、用地取得を行っている。

その後、ダム本体や貯水池周辺の保全策について調査や設計が進捗し、実施設計が確定すると、例えば、ダム位置の相当の変更や貯水池周辺の地すべりの押え盛土の対策等によって、上記の貯水池容量が不足する場合が生じる。この場合、買取高線を上げて対応することが考えられるが、実際には用地の追加買収は困難な場合が多い。

貯水池の容量が不足した場合、利水容量や洪水調節容量を変更はダム事業の基本計画に影響を及ぼすため、通常堆砂容量を変更する対策によって貯水池計画に影響を及ぼさない措置が取られる。すなわち、貯水池の上流域に貯砂ダムを設置して、貯水池に流入する土砂をこの貯砂ダムによって、一時滞留させて排出することによって調節するものである。

公団が実施した建設事業において、上記のような事情から貯砂ダムを設置したダムには味噌川ダム、浦山ダム、辻澤ダム(計画)がある。

また、管理段階において計画より速く堆砂が進んでいるダムについては、貯水池保全事業によって貯砂ダムを設け削除する対策が制定化されており、これによって貯砂ダムを設置している、これらのダムには岩屋ダム、草木ダム、下久保ダム(計画)がある。

(3) 貯水池の水質保全

ダムの上流域に畜舎等がある、流入水質が悪い場合には、貯水池内の対策では十分な効果が得られない。そのため、貯水池上流域の副ダムに汚濁物質を沈殿させて貯水池内への流入水の水質を改善させるものである。副ダムの上流域に土砂とともに窒素、リンを沈降・堆積させることにより水質を改善し、土砂を排出することによって、域外に汚濁物質を排除するものである。

阿木川ダムではこの目的のために3基の副ダムを建設段階で設置している。布目ダムでも同様の目的で副ダムを設置している。

(4) 湖面利用

洪水削制限水位を有するダムの湖面をボートや釣り等のレジャーに利用する場合、次の問題が生ずる。

・最も利用が期待される夏期に貯水位まで低下し、湖岸に裸地の法面が露出して景観の上で好ましくない。

・制限水位の上流域末端部の堆砂が流入水により洗掘されて湖水が濁る。

このような貯水池の上流域部に副ダムによる貯水池を設けることで副ダム上流域の水位を一定にして、景観の確保、汚濁防止を行って、湖面利用の価値を高めることができる。布目ダムの副ダムはこの目的を兼ねて設置している。

(5) 計画中の計画

表3-1 水資源開発公団における貯砂ダム等一覧表

(1/2)

ダム名	設置目的	建設費(億円)	貯水池面積(m ²)	貯水容量(m ³)	堤高(m)	型式	堆砂量(m ³)	水通量(m ³ /秒)	施工	施工
布目ダム	容量保全、水質保全、湖面利用	2.8	72.0	263,000	145.3	13,000	69.0	船渠	1.076	岩盤アーチ
岩屋ダム(馬場川)	容量保全	4.4	167.9	12,259	97.0	81,000	9,600	船渠	1.033	岩盤アーチ
草木ダム	容量保全	4.7	64.9	1,070,000	9.5	82.0	5,700	船渠	1.10	岩盤アーチ
浦山ダム	容量保全、湖面	5.0	228.0	0	140.0	3,600	70.0	船渠	1.020	岩盤アーチ
味噌川ダム	容量保全	2.9	36.0	2,600	15,240	26,000	11.1	44.7	2,510	岩盤アーチ
阿木川ダム(阿木川II)	水質保全	5.4	35.6	70,000	108,000	14.6	55.5	5,500	2,058	岩盤アーチ
阿木川ダム(岩井川II)	水質保全	2.7	25.5	15,300	42,500	14.5	53.0	4,620	35.0	岩盤アーチ
阿木川ダム(運量II)	水質保全	2.0	8.2	10,041	99,000	14.8	65.7	3,600	63.5	岩盤アーチ
辻澤ダム	容量保全	34.0	13,500	72,000	100,000	Gravity	11.3	45.0	2,470	岩盤アーチ

注：

1) 堤頂堆砂量は、水通し高さからレベル算出しているダムと河床勾配の1/2を加えて算出しているものがある。

2) 堤頂大底によると基礎地盤強度の変換の有無を示す。

3) 容量保全のための施設として計画されている。

表3-1 水資源開発公団における貯砂ダム等一覧表

ダム名	目的	建設期間 (起終)	建設費用 (億円)	建設費の負担	貯砂ダムの計画及び実績			堆砂の用途
					貯砂ダム建設の年 (m ³ /年)	年流入砂量 (m ³ /年)	年堆砂量 (m ³ /年)	
布目ダム	容量保全、水質保全、湖面利用	H1.11	2.8 布目ダム建設事業	18,750	18,750	5,000	16,000	5,700
岩瀬ダム(馬場瀬)(完成後7年堆砂率31.1%)	容量保全	S6.0~H1	4.4 貯水池保全事業 (管路内ロケ)	137,748	278,200	170,000	1,835	1,478 無
岩瀬ダム(完成後16年で堆砂率35.3%)	容量保全	H5~H8	4.7 貯水池保全事業 (管路内ロケ)	137,748	不明	測定無し	無	無
日出ダム(完成後16年で堆砂率35.3%)	容量保全	S6.9	5.0 貯水池保全事業 (管路内ロケ)	100,076	81,000	120,000	5,050	無
草木ダム	容量保全、湖面利用	H1.12	2.9 草木ダム建設事業	20,040	10,000	10,000	無	未定
浦山ダム	容量保全、河床利用	H5.3	5.4 浦山川ダム建設事業	55,100	55,100	20,000	5,010	無 利用なし (進入路あり)
林野川ダム(完成未)	容量保全	H12.10	建設中 貯水池保全事業 (管路内ロケ)	100,000	150,000	30,000 ~40,000	9,400	建設中
下入保ダム	水質保全(栄養塩の沈降除去)	H2	1.6 下入川ダム建設事業	40,000	19,000	計画無し	4,427	12,380 コンクリート骨材 利用なし
阿木川ダム(完成未)	水質保全(栄養塩の沈降除去)	H2	2.70 阿木川ダム建設事業	400,000	14,000	計画無し	11,510	2,302 利用なし (航路に不可)
阿木川ダム(完成未)	水質保全(栄養塩の沈降除去)	H2	2.033 阿木川ダム建設事業	40,000	1,500	計画無し	4,333	4,235 利用なし (航路に不可)
浅沢ダム	容量保全	計画中のものである		26,000	26,000	計画中のものである		計画中

注: 1) 東毛妙利共同組合に対して導入前の使用承認(原木ダム)、土砂は砂等の状況で建設費、採取料の内訳(総事業費: 230円/m³)を用いて算出した。2) 原石山に施工した押え押土による堆砂容量のうち150万m³を算出するにとどめた。3) 貯水池上流部に貯砂ダムを設置する「貯水池保全事業」を、平成7年度から実施している。

(3) 下久保ダムの貯砂ダムの計画概要

1) 堆砂の状況

下久保ダムは昭和44年の管理開始から約30年を経過したが、平成10年4月現在における総堆砂量(6,117,710m³)はすでに計画堆砂量(1,000万m³)の61.2%に達し、計画の約21倍の速度で堆砂が進行している。このため、貯水池深部への流入土砂の抑制と有効活用を図ることを目的として、貯水池上流部に貯砂ダムを設置する「貯水池保全事業」を、平成7年度から実施している。貯水池の堆砂状況は、図3-9の堆砂量経年変化図に示すとおりである。

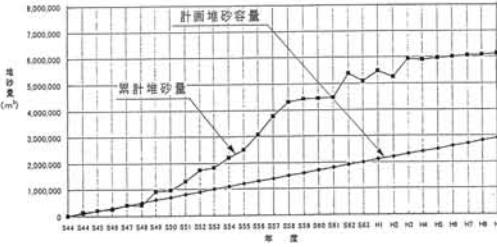


図3-9 堆砂量経年変化図

2) 貯砂ダムの諸元

下久保ダムの貯砂ダムの諸元を表3-3、貯砂ダムの平面図、三面図を図3-10、図3-11に示す。

表3-3 下久保ダム貯砂ダム諸元

位 置	群馬県多野郡万場町大字柏木地先
地 質	古生代板岩片岩類
形 式	鋼製鉄骨ダム
高 度	50 m
堤 頂 長	91.0 m
ダム基 礎 標 高	EL.279.0 m
水通 し天端 標 高	EL.284.0 m
袖 部天端 標 高	EL.286.0 m

3) 地形・地質

貯水池周辺は、中央構造線と御荷鉾構造線に挟まれた三波川帯に属し、主として結晶片岩類の分布する地帶で、泥質片岩、塩基性片岩等を基盤岩としている。これらの岩石には著しい節理が発達しており、薄く板状に割れやすい性質をもっている。貯砂ダム付近の地質も古生代の岩層が变成したいわゆる御荷鉾変成岩が発達しており、硅質片岩、綠泥片岩あるいは石墨片岩等の異種により基盤が構成されており、その上を河床堆積物が厚く被覆している。

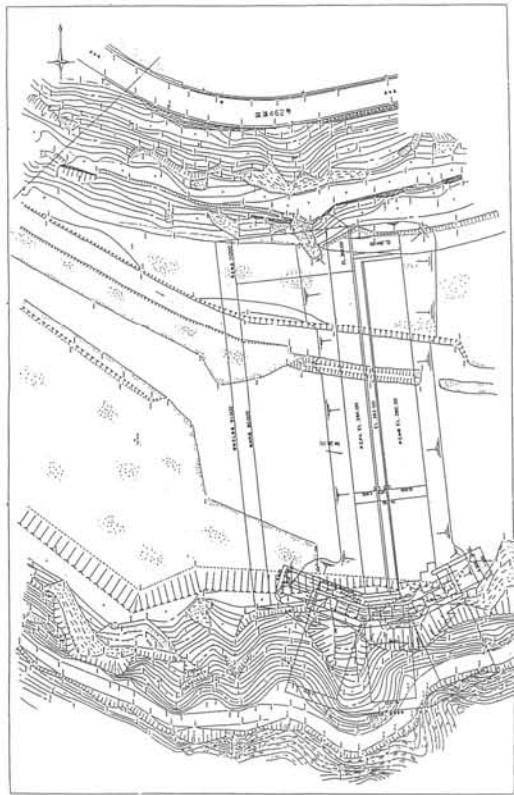


図3-10 下久保ダムの貯砂ダムの平面図

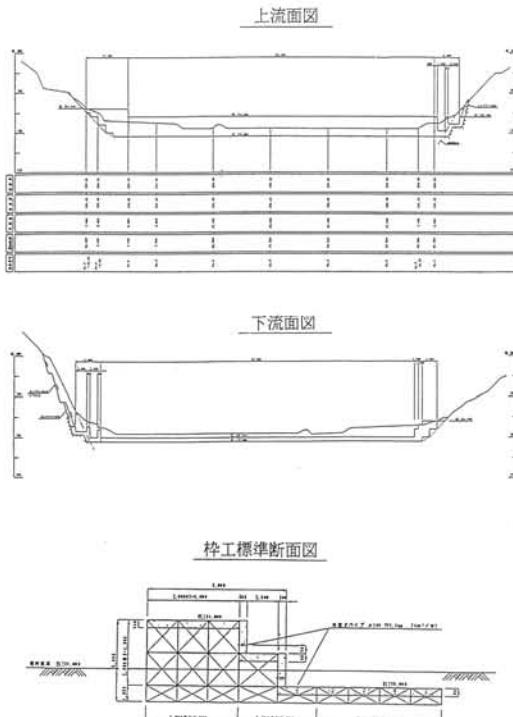


図3-11 下久保ダムの貯砂ダムの三面図

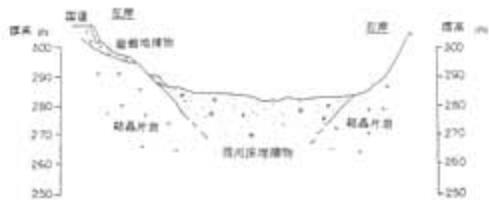


図3-1-2 ダム地盤構造断面図

4.1 豊砂ダム設置地点の特徴

- 当所蔵ダム設置地盤の条件として考慮されたのは、次の事項である。
 - ①下り保ダムの運用に大きな支障を及ぼさない。
 - 盆地すり地域等の危険地域からはずれている。
 - 河岸線の安定度がよい。
 - 年計画高水流量を安全に満足できる河川断面がある。
 - 盆地堆積地帯（お様ヶ穴断層）の構造を構なわない。
 - セリウム層で土砂搬出が可能なこと。
 - 砂採用にあたり、適切な砂採取量を確保できる。
- これらを検討した結果、豊砂ダムの設置位置を夏原前頭水位附近（水道し大堤標高 13.244m）とした。土砂採取地點についてはその上流約400 m「お様ヶ穴の底平流」までを対象とした。



図3-1-3 豊砂ダム設置地点

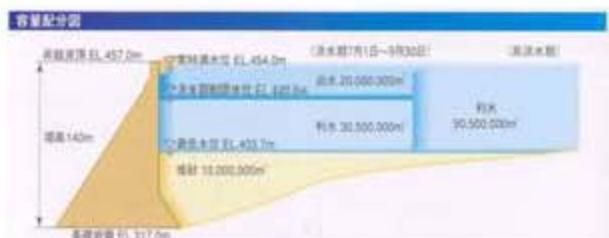
5.1 設計上の特徴

- ①「離型せん堀造方式」の採用
- 豊砂ダムを設置する豊水池上流河床には、すでに河床上に砂丘を越える土砂が堆積している。

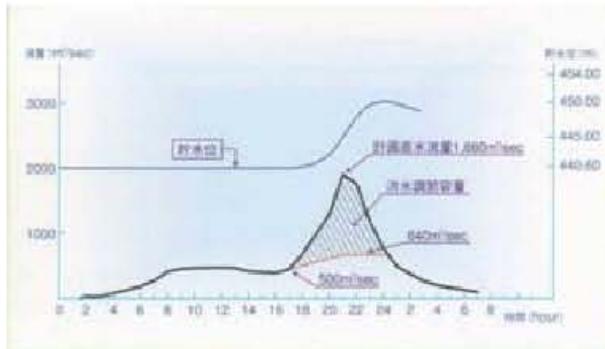
(十一) 草木水庫管理所—草木水庫



草木ダム容量配分図

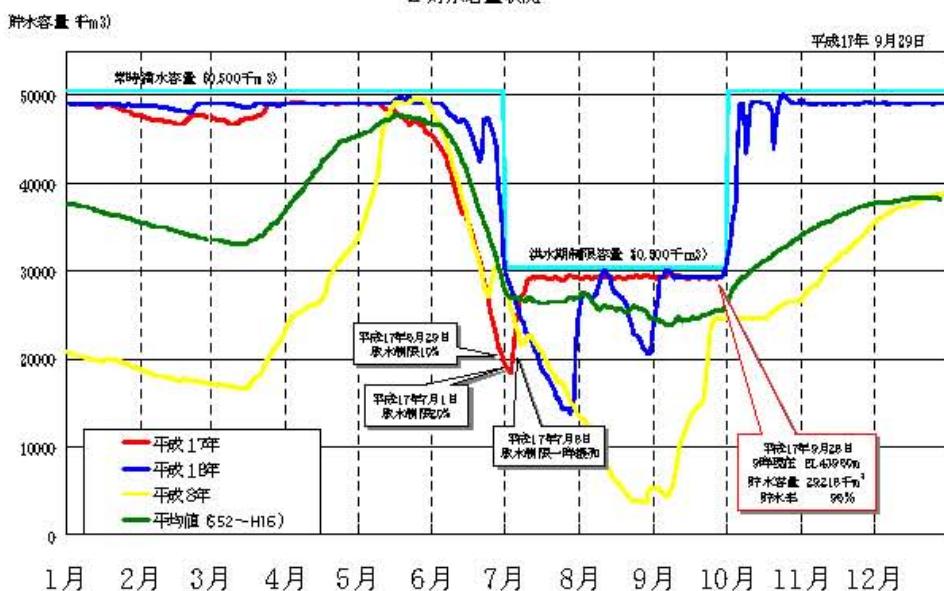


草木ダム洪水調節図



草木ダムの流況について

2. 貯水容量状況



草木ダム堆砂経年変化

